

### 翻訳の誤謬：花袋、敏、鷗外のばあい

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

59

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

170

(終了ページ / End Page)

116

(発行年 / Year)

2012-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021138>

## 翻訳の誤謬

——花袋、敏、鷗外のばあい

宮 永 孝

ヨーロッパの文学でわが国にいちばん最初に紹介されたものは、ギリシャの寓話作者アイソポス（前六二〇ごろ～五六〇ごろ、トラキアまたは小アジア生まれ）が、口語で語ったものを編んだ『伊曾保物語』である。<sup>(1)</sup>これは文禄二年（一五九三）キリシタンの僧によって、天草の耶蘇<sup>ヤソ</sup>会学林において刊行された。題して「エソポのファブラス（<sup>たとへごと</sup>喩言）」という。

訳者は「平家物語」の口訳者である伊留<sup>イル</sup>満<sup>ルマ</sup>ハビアンであろうといわれている。<sup>(2)</sup>ラテン語から平易な俗文体で訳したもので、その後同種本および翻案戯曲のたぐいが、諸所においてたくさん刊行された。<sup>(3)</sup>いずれにせよ、このイソップ物語こそ、キリシタンの教学の書を除くと、西洋文学翻訳の嚆矢をなしている。

日本は世界有数の翻訳工場でもある。いまそのスピードは鈍化しているとはいえ、書店に行くと、相変らずあらゆる分野の訳書が目白押しにならないでいる。文学書だけに限っても、明治初年から昭和三十年代半ばまでの間に刊行された訳書（重版をいれても）の数は、三万数千点にのぼるという。<sup>(4)</sup>平成のこんにち、その数ははるかにこれを凌駕しているはずである。

“翻訳”とは何のことか。その定義とは何か。いまいくつかの国語辞典や漢和辞典によると、つぎのように説明される。

——ある言語で表現された文章の内容を他の言語になおすこと。『広辞苑』。

——ある国語で表された文章の内容を他の言語になおして表すこと。『学研国語大辞典』。

——ある国の言語・文章を同じ意味の他国の言語・文章にうつすこと。小学館『国語大辞典』。

——ある国語を他の国語に移し替える。角川『大字源』。

なお、漢語（中国語）にも“翻訳”の語がみられ、『隋書經籍志』（卷四佛經）につきのようにある。

至桓帝時、有安息國沙門安靜、齋經至洛翻譯、最爲通解。<sup>(5)</sup>

（後漢の桓帝のときに至って、安息國に沙門（修業僧）安靜あり、經（經文）をもたらし洛陽（中国の旧都）にいたり、翻訳し、もっとも通解たり（意味が通じ、りっぱな解釈になった）

要するに、“翻訳”ということばによって、ふつう一般に理解されていることは、国語の移し替えである。<sup>(6)</sup>

海外からわが国にもたらされた文献の翻訳事業は、幕末から維新にかけて兵書が多く、明治初期には欧米列強の政治、憲法の書の訳出が盛んとなる。文学書の翻訳が現れるようになったのは、およそ明治十年以降のようである。同二十年代に入ると、時代の欧化主義の影響もあって、訳書の数がにわか増え、逐語訳の傾向がいちじるしくなる。<sup>(7)</sup>そして明治四十二、三年ごろ、海外文芸の紹介がいつそう活発化すると、誤訳指摘といった一種の現象が生じるのである。<sup>(8)</sup>

明治以後、わが国に入って来た西洋の学問——人文科学・自然科学にしても、すべてが西洋文明から拝借したものであり、ことばを変えていえば、西洋学問の剽窃（かすめ盗む）であった。<sup>(9)</sup>

日本に在留する外国商人や日本商人らが輸入した文芸作品は、文学者によって読まれ、ときに文章の手本とされ、またそれを日本語に移すことによって、日本文学は滋味に富んだものになっていった。しかし、語学が発達し、外国文に強い人間がふえるにつれて、著名な文学者や学者の訳業のあやまちを指摘し、非難する者が現れるようになった。誤訳というものは、不可避なものであるから、訳書のなかに誤訳がないとしたら、それは驚くべきことでもある。秀作は欠点が多いものとされている。

本稿は明治・大正期を代表する文芸家——田山花袋、上田敏、森鷗外らの誤訳問題を取りあげ、かれらに対する非難が、はたして当をえたもの



森田思軒

であったのかどうかを明らかにしようとしたものである。また明治期における翻訳論——翻訳の心得や亀鑑（てほん）、翻訳のあるべき姿などを識者の意見を紹介しつつ、筆者の管見をのべたものである。

\*

明治の二十年（一八八七）以降、日本文壇は翻訳というものをどのように捉え、何を心がけたのか。つぎに引くものは、明治人の考えた翻訳のあり方についてのさまざまな意見である。

明治期の翻訳王の異名をとった森田思軒（一八六一―一九七）によると、いまの翻訳をみると、巧拙（こうせつ）（じょうず・へた）はいろいろある、という。訳者の多くは、確定せる原則をもたず、暇なとき漫然と横文字を縦文字に更えているにすぎない、という（森田文蔵「翻訳の心得」『国民之友』第十号所収、明治20・10）。

森田思軒といえ、ヴィクトール・ユゴー（一八〇二―一八五、フランスの作家）の紹介や翻訳で有名になり、「探偵ユーベル」は二葉亭四迷（一八六四―一九〇九）の嗜好書目のなかに加えられた。「ユーゴーの名遣（なむか）に文壇（ぶんだん）を聳（しやう）動（どう）せり」という（『女学雑誌』第四三四号所収、明治30・1）。

われわれは一日も早く、世の技倆にすぐれた文学者が、未開の文学界をひらく手段として盛んに翻訳に従事することを願う、といい、いま美文を翻訳して、あたかも原作者をほうふつとさせる訳者をあげると三人おり、それを如來（にらい）（仏の尊称）と名づけるべきという。英文畑の如來は、森田思軒、ドイツ語畑の如來は森鷗外、ロシア語畑の如來は長谷川四迷である（『外国美文学の輸入』『早稲田文学』第三号所収、明治24・11）。

ジョン・ドライデン（一六三二―一七〇〇、イギリスの詩人、批評家、劇作家）の翻訳論の大意は、つぎのようなものである。外国文を翻訳せんとする者は、まず国語に精通した批評家であらねばならぬという。また原作者の国語を会得し、かつ自国の語を自由にあやつれる者でなければならぬ。外国の詩歌を翻訳する者は、まずじぶんが詩人たることが肝要だという（『翻訳すべき外国文学』『早稲田文学』第四号所収、明治24・11）。

翻訳の要旨とはなにか。それは自国にない、すぐれたおもしろ味を国民に知らせることであり、なるべく有名な傑作や雄編（すぐれた作品）を訳すことである（「翻訳」『太陽』第七号所収、明治27・12）。

わが国の文壇をみると、創作面において長足の進歩をみることなく、翻訳もまたひじょうに幼稚である。西洋の諸大家の傑作、いまだわが国に紹介されていない。訳述（翻訳）なるものは、七分の訳に、三分の創作を加えたものである。真正（本物で正しい）の翻訳によって、海外の傑作がひろく一般に紹介されることを望みたい（「翻訳の真相」『帝国文学』所収、明治28・8）。

日本人の思想は、まだはるかに十九世紀思潮の水平線に達していない。われわれは外国書を翻訳することによって、国民の思想を高める手段とせねばならない。が、わが国の翻訳者の中には、翻訳者たることを忌避する傾向が生じてきた。学者の多くは、翻訳や翻案をもって自説とすることの陋態（みぐるしいさま）を忍んでいくせに、忠実なる翻訳者としてその名を公にすることをはばかっている（「翻訳時代」『太陽』第二卷第八号所収、明治29・4）。

わが国の学界においては、原著者と訳者との関係はひじょうに奇妙である。正直な訳者は、原著者と同席することを許容する。しかし、多くの翻訳者はその姓名が二号活字であれば、原著者は四号ないしは六号である。はなはだしい例は、原著者の名をすっかり省き、翻訳者の名だけをかがけている。そして序言の中で、人に目立たぬように「……氏の原著による」と記している（「翻訳者と原著者」『太陽』第二卷第九号所収、明治29・5）。

わが国においては、創作の才能に乏しいものは、往々にして翻訳に走るのが常である。一国の文学はつねに他国の文学と接することによって新思想を注入するのだから進歩は望めない。翻訳はこの点において最も有効な手段である。他国の傑作をわが国語に移して、読者の嗜好を高めることはいまの文壇にとって必要なことである（「翻訳の気運」『少年文集』第二卷第六号所収、明治29・6）。

われわれは一般に翻訳を奨励するが、いかなる人にむかって、いかなる書を訳してくれとはいわない。翻訳とはみだりに字引にある訳語を採って、原語に代えることではない。母国の思想によって、渾然同化し、さらに母国語によって再製すべきものである。したがって訳者は彼我の言語をじゅうぶんに操縦し、味解する能力がなければならぬ（「西洋美文の翻訳者に告ぐ」『太陽』第二卷第一五号所収、明治29・7）。

いまや翻訳推奨の声は、ほとんど社会の世論となっている。国家の保護のもとに洋書の翻訳を奨励し、もし国家にとって有用な書があれば、これを官費をもって翻訳するのによい（「再び外邦書典の翻訳に就て」）。

外国文学の翻訳は、国文学を盛んにする第一策である。もし将来において、国文学が盛んになる時期がきたら、それは翻訳界が繁盛したあとでなくて

はならぬ（「翻訳物の読者」『帝国文学』所収、明治30・4）。

翻訳だけで食べて行こうとすると、粗雑になりがちである。粗笨（あらっぽく、雑）を避けようとすれば、本業を持たねばならない。生活の余裕のない文士は、覚悟をもって翻訳に従事せねばならない（「翻訳壇」）。

原文に忠実なろうとするあまり、依然として直訳のきらいがあるのは訳者のために惜しいことである。直訳の語気をやわらげて、一般読者にとってわかりやすい文体にすべきである（「純文学以外の翻訳壇」『早稲田文学』第七年第十号所収、明治31・7）。

訳書をよむ人の多くは、原文を味わうことができない人である。かれらは翻訳を媒体として、原文のおもさしを見ようとするのだが、その訳文たるや欠点だらけである（『文庫』第二五卷第一号所収、明治37・1）。

欧文を翻訳するときにはいちばん困ったのは、ヨーロッパ特有の術語を日本語に訳すときであった。政治、法律、理科、哲学、文芸などに関するヨーロッパの術語のほとんどすべては新奇なものであった。それらを精確に表現することばに乏しかったために、はじめ翻訳に従事した学者らの苦心は想像を絶するものであった。訳語の多くは、後年各学者によってしだいに修正され、また創作されたものも少なくなかった。これらの先輩諸氏は、明治の文章に果たした功績は大きく、われわれは深く感謝せねばならぬ（春汀散史\*『明治の翻訳家（月旦）』『文章世界』二卷一号所収、明治40・1）。

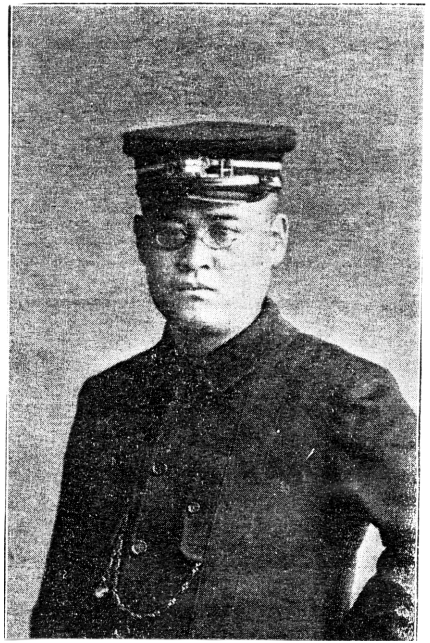
\*鳥谷部春汀（本名・銚太郎、一八六五〜一九〇八、明治期のジャーナリスト）のこと。東京専門学校卒業後、『毎日新聞』『太陽』などで評論活動をつづけた。

原作のいろいろの方面に注意を払うようになって、文章以外の調子や情味を伝えなくてはならぬので、筆の運びがひどくおそい。もともと日本語の知識に乏しいので、原文がいくらよくわかって、適当な邦語を考えだすのに手間がかかる。わずか一語一句訳するのに手間がかかる。わずか一語一句訳すのに一日か二日を費す場合も珍しくない（昇曙夢「研究と翻訳との十ヶ年——翻訳上の態度及苦心」『文章世界』第七卷第二号所収、明治45・2）。つねに「新」にむかって心がけているわれわれは、翻訳をするに当って、つとめて原文の表現の形式に重きを置いて、なるべく原文の味を出すことにつとめなければならぬ（「翻訳の利益」『文章世界』七卷三号所収、明治45・2）。

\*

## 田山花袋

自然主義とは、人間の生きたか社会生活を直視し、ありのままに描写することをいい、フランスのエミール・ゾラ（一八四〇〜一九〇二）が小説の領域にもちこんだのであるが、その風潮はモーパッサン、ゴンクール兄弟、ドーデらにうつがれた。わが国においては、明治の自然主義勃



明治37年4月、宇品港出発のときの田山花袋。  
『早稲田文学』(明治41・1)より。

興の時期に最も強力な感化力をもっていたヨーロッパ作家は、ギイ・ド・モ  
ーパッサン(一八五〇〜一九三二)であった。

田山花袋(一八七二〜一九三〇、明治・大正期の小説家)は、モーパッサ  
ンを発見するやその著作を英訳でよむことに没頭し、そこから著しい感化を  
うけ、創作に利用するのである。十九世紀のヨーロッパ大陸の澎湃ほうはいとした思  
潮(思想のながれ)は、日本橋丸善の二階を通して、極東の一孤島(日本)  
にもたえず微かすかに波打ちつつあったのである(花袋「丸善の二階」『東京の  
三十年』所収)。

明治二十年代後半、英語で各国文学をよもうとしても、まだ英訳本がひじょうに少なく、外国文学を研究しようとするとき、本がないのでひじょうに困ったという(田山花袋「私と外国文学」)。

花袋がはじめて英訳のモーパッサン短篇集をみつけたのは、国木田独歩(一八七一〜一九〇八)と日光の寺院で自炊生活をしていたときである。町の古本屋で西洋人が売りどばして行った小説のなかに、それを見いだしたのである。かれはその本によってモーパッサンの一端を知り、その後モーパッサンのいろいろな英訳本を捜すようになった。

それ等フランス自然派の小説を一冊一冊と手に入れるたびに、知人の間に吹聴して、互ひに回覧したのであった。私が早稲田を卒業した時、或用事もちで、柳田国男(一八七五〜一九六二、明治から昭和期にかけての民族学者——引用者)を訪ねると、氏は、「君はモウパッサンを知ってゐるか」と訊いて、花袋蔵書の「ベラミー」を、私に貸してくれた(正宗白鳥「日本文学に及ぼしたる西洋文学の影響」『岩波講座 世界文学』所収、昭和8・2)。

花袋が日光の古書(洋書)店を買ったというモーパッサン短篇集というのは、同人の書『東京の三十年』によると、短篇集ではなくて長篇の『ピエールとジャン』であったようだ。しかし、花袋がモーパッサンの名を初めて知ったのは、上田敏が持っていた“The Odd Number”という短

篇集を通じてであった。柳田国男は上田から同書を借り、こんどは花袋が柳田からそれを借り受けたのである。柳田国男がまた貸した「オッド・ナンバー」の英訳本によって、花袋は、――

〔小 二兵卒〕 (*Little soldier*) …………… 『少年文集』 明治31・4

〔コルシカ島〕 (*Happiness*) …………… 『読売新聞』 明治31・8・9

〔散歩〕 (*Abandoned*) …………… 『文藝倶楽部』 明治35・1

などの作品を三篇、本邦最初の邦訳として発表した。

京都大学附属図書館の上田文庫にあるモーパッサンの作品は、つぎの二作という。

“*Histoire d'une fille de ferme*”, 『ある農家の女中の話』 Paris, Ernest Flammarion, Éditeur, 1889?

“*Sur l'Eau*” 『水の上』 Paris, Ollendorff, 1899

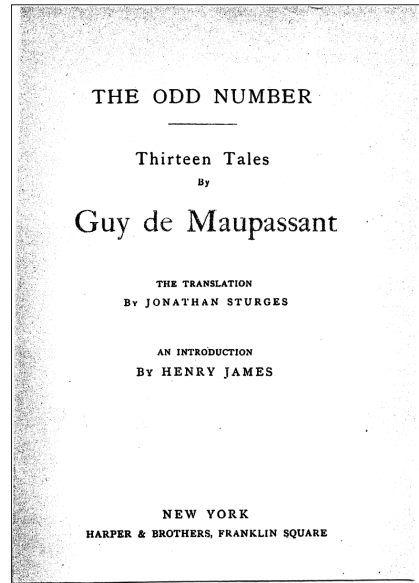
注・伊狩 章「田山花袋とモーパッサン——その比較研究」『弘前大学人文社会』第四号所収、昭和29・4。

花袋がモーパッサンの短篇を訳すとき依拠した記念すべき「オッド・ナンバー」は、柳田国男に貸したきり、そのまま手元に戻らなかったものか、上田文庫にもなく、現在（昭和二十九年の時点）でその存在すら明らかでないという（伊狩章の前掲論文、二〇頁）。

しかし、筆者はこれと同じ版本を最近入手することができたし、『ある農家の女中の話』と同一原本を早稲田大学中央図書館において実見した。

上田敏旧蔵の“The odd number”（奇数の意）——『モーパッサンの十三の物語』 (*Thirteen Tales by Guy de Maupassant*, 17.8 cm × 11.5 cm) の訳者は、ジョナサン・スタージス。序文はヘンリー・シェームズによるものであり、この物語集は、ニューヨークのハーパー・アンド・ブラザーズ社から一八八九年（明治二十二年）に刊行された。同書には、つぎの十三篇が収められている。





『モーパッサンの13の物語』（1889年刊）。  
[筆者蔵]

I. HAPPINESS .....	3
II. A COWARD .....	19
III. THE WOLF .....	39
IV. THE NECKLESS .....	53
V. THE PIECE OF STRING .....	73
VI. LA MÈRE SAUVAGE .....	91
VII. MOON LIGHT .....	109
VIII. THE CONFESSION .....	123
IX. ON THE JOURNEY .....	137
X. THE BEGGAR .....	153
XI. A GHOST .....	167
XII. LITTLE SOLDIER .....	185
XIII. THE WRECK .....	203

「小説 二兵卒」は、日本紙十五枚に細かい毛筆書きであったもので、二カ月ほど筐底に秘してあったが、のち『少年文集』に発表された。翻訳の草稿は前田晃（あきら）（一八七九〜一九六一、小説家・翻訳家。早大英文科卒、のち『文章世界』の編集にしたがう）が所蔵している。表紙裏に「明治卅一年二月五日稿成」とある、という（前掲伊狩論文）。

原作は“*Petit soldat*”（「小兵士」）という。一八八五年八月『フィガロ』紙に掲載された。物語はブルタニユから徴募された二人の兵士が、日曜日ごとにパリ郊外に遊びに出かける。そのうちに乳しぼりの娘と知りあい三角関係となる。失恋した一兵士のほうは、セーヌ川に投身自殺するという筋である。この作品は本邦最初のモーパッサンの翻訳と考えられている。

いまこれより花袋が訳した三つの短篇——「小説 二兵卒」「コルシカ島」「散歩」の訳業を検討してみることにする。「小説 二兵卒」の冒頭の一筋はつぎのようになっている。

LITTLE SOLDIER.

EVERY Sunday, as soon as they were free, the two little soldiers set off.

On leaving the barracks they turned to the right; went through Courbevoie with long quick steps, as though they were on a march; then, having left the houses behind them, they followed at a calmer gait the bare and dusty high-road which leads to Bezons.

Being little and thin, they looked quite lost in their coats, which were too big and too long. The sleeves hung down over their hands, and they were much bothered by their enormous red breeches, which compelled them to walk wide. Under their stiff, high shakos their faces seemed like mere

nothings—two poor, hollow Breton faces, simple in an almost animal simplicity, and with blue eyes which were gentle and calm.

During the walk they never spoke. They went straight on, each with the same idea in his head as the other. It stood them in place of conversation; for the fact is that just inside the little wood near Les Champioux they had found a place which reminded them of their own country, and it was only there that they felt happy.

When they came under the trees where the roads from Colombes and from Chatou cross, they would take off their heavy shakos and wipe their foreheads.

小二兵 田山花袋 譯

(一)

いつの日曜日にも、外出の許が出るまで直ぐ、二人の小兵士は、一所に併立つて出て行くのが、殆どいつも例であつた。先兵營の門を出ると、その儘直ぐ右に曲つて、シントルヒの町は、進軍の時でもあるかのやうに早い驕足で駆け通つて、それから最後の家をも通り抜けて了ふと、そろ／＼歩調を静にして、荒れ果てた埃だらけのベソン村への大道を、てく／＼として歩いて行く。

二人は丈が低くつて身軀が小さいのに、軍服が餘りに大きく餘りに長いから、その恰好はきこに變つて、何だかその身軀がすつかりその軍服の中で隠れて了つて居るやうに思はれる。両手にも長い筒袖が蔽ひ冠さつて、一寸手を出すにも中々容易の事では無いが、それよりも猶一層困るのは、長いたぶ／＼した赤いずぼんで、これをはいて居る爲め、二人は出来る丈股を濡くして歩かなけりや爲らなかつた。

高い帽を冠つて居るが、その下から頭にはいかめしいつたら、それは／＼無意味なもので—そこからは、只動物の單純でも言ふやうな單純と、やさしい穏かな目付をした二つのアリトンの生れの顔が、うつとりしてさも憐れ氣に顯れて居る。

歩いて居る間は、二人は決して何一語をも話した事がない。二人は只同じやうな事を考へて、てく／＼と眞直にその志した所へ歩いて行くばかりである。その志す所は何處かと言ふと、それはレ、チャン村の近傍の小さな森の中で、その四邊が好くその故郷の景色に似てゐるといふので、それを見出した時から、二人はいつも其處に行つて、互に楽しい話を爲るやうになつたのであつた。二人が幸福を感ずるのは、その森の中に居る時ばかりである。

で、先の大道を猶少し歩いて行くと、コロンボエからの路とレルテルタからの路とが、十字に爲つて行違つてゐる四辻の角の處へ出る。其處には一本の大樹が厚しい蔭を作つてゐるが、二人は此處に来ると、いつも言合せたやうに立留つて、その軍用軍帽を脱いで、額の汗を拭ふ……………

草稿では Courbevoie は「コルヘボイイ」という風に表記されていることだが、『少年文集』においては、どういふわけか「シングルヒ」となっている。with long quick steps は「早い駆足で駆け通つて」と訳されているが、「大またの急ぎ足」とでも訳すべきか。Bezons は「ベンソン」となっているが、「ブゾン」とすべきであろう。「てく〜」とは、花袋の加筆部分。「丈が低くつて身体が小さい」は、原文の Being little and thin を訳したものであるが、「背が低く、やせていたので」の意である。花袋は coats を「軍服」と訳しているが、「外套」とすべきものである。「その恰好はまことに変わつて」は、花袋の創作的加筆である。

「一寸手を出すにも中々容易の事では無いが、それよりも猶一層困るのは」も創作文。「高い帽」とは、Shako (軍帽) を訳したものである。Their faces seemed like mere nothings を花袋は、「その下から」顕れて居る顔と言つたら、それは〜無意味なもので」と訳している。この箇所は、小日向訳(花袋訳の三年後、「一九〇一・一一、『帝國文学』誌に掲載された)によると、「彼等の顔面は、有るかなきを疑はしめ」となっている。この一文の意味は、「かれらの顔ときたら、これといった特徴はなかった」である。

—two poor, hollow Breton faces, simple in an almost animal simplicity and with blue eyes which were gentle and calm (それは二つの貧相なほおがこけたブルターニュ人特有の顔であり、お人よしな、まるで動物のように無邪気なものであった。そして目といへば、それは青いのだが、やさしく、おだやかであった) の文を、花袋は、「そこからは、只動物の單純とでも言ふやうな單純と、やさしい穩やかな目付をした二つのブリトン生れの顔が、うつとりとしてさも憐れ気に顕れて居る」と訳しており、だいぶ原文から逸脱した訳文になっている。

It stood them in place of conversation (それは会話の代わりになっていた) は、「同じやうな事を考へて」と意識した。「その志す所は何処かと言ふと」は、創作的加筆。for the fact is that just inside the little wood near Les Champieux they had found a place which reminded them of their own country, and it was only there that they felt happy. (なぜならシャンピウのそばの小さい森のちようど入口のあたりに、かれらの故郷を思い出させるやうな場所をどくに見つけてあったので、そこにたどり着くまでは幸福を感じることはなかった) の部分は、花袋訳だと、だいぶ創作的な訳文に変わっている。すなわち、「それはレ、ジャン村の近傍の小さな森の中で、その四辺が好くその故郷の景色に似てゐるといふので、それを見出した時から、二人はいつも其處に行つて、互に楽しい話を為るやふになつたのであった。二人が幸福を感じるの、その森の中に居る時ばかりである」と、原意と別物にかわつてしまつた。

「で、先に大道を猶少し歩いて行くと」は、創作的加筆。Colombes は「コロンボエ」、Chatou は「レルテルケ」と表記されている。

「其處に一本の大樹が涼しい蔭を作つてゐるが、二人は此處に来ると、いつも言合せてやうに立留つて」は、花袋の創作的加筆。

「小 二兵卒」は完訳であるが、もう一つ巻末の一節を引いて吟味してみよう。

Luc, his throat paralyzed with anguish, tried in vain to shout. Farther down he saw something stir; then the head of his comrade rose to the surface of the river and re-entered it as soon.

Farther still he again perceived a hand, a single hand which issued from the stream and then plunged back. That was all.

The barge-men who ran up did not find the body that day.

Luc returned alone to the barracks, running, his head filled with madness; and he told of the accident, with tears in his eyes and voice, blowing his nose again and again: "He leaned over . . . he . . . he leaned over . . . so far . . . so far that his head turned a somersault; and . . . and . . . so he fell . . . he fell . . ."

He was strangled by emotion, he could say no more. If he had only known!

〔花袋訳〕

ラックはあまりの事に驚いて、叫ばうとしたが、聲が出ない。すると、その少し下流に、ふと何物か浮び出た。かと思ふと、その友の頭が、ちよつと川の面に現れて、そして又すぐ沈んで見えなくなつた。はつと流れて、我を忘れて、じつと見てゐると、又その少し下流に、ふと手が . . . 僅かに少しばかり手が . . . : かと思ふと、それも又沈んで了つた。それつ切であつた。探しに出た船頭は、その日の中に、死體を見出す事が出来なかつた。ラックは一人で走つて兵營に歸つた。かれの腦は錯亂して、丸で狂せんばかりの有様であつた。で、かれはその珍事を人々に話したが、泣かずにそれを話す事が出来なかつた。かれは涙と鼻をすゝりながら、かう凭り掛つて . . . : かういふ風にして . . . : それでも止めずに、まだく頭を先に深くく凭りかゝつて行つて . . . : そして不意に筋斗かへりを打つて . . . : 落ちて了つたんだ . . . : 落ちて了つたんだ . . . : ！

かれはこれ以上を語る事が出来なかつた。あゝそれを知つたならば！

(完)

Luc は、フランス語音では、「リュック」と表記すべきものであろう。「はつとして、我を忘れて、じつと見てゐると」は、創作的加筆。The barge-men who ran up did not find (駆けつけた船頭らは) は、花袋訳だと「探しに出た船頭」となっている。

he told of the accident, with tears in his eyes and voice, blowing his nose again and again (目に涙をため、涙声でこの事件について語つた。そしてしきり鼻をかんだ) は、「かれはその珍事を人々に話したが、泣かずにそれを話す事が出来なかつた」と意識されている。「かれは涙と鼻とをすゝりながら」の個所も意識である。

He leaned over . . . he . . . he leaned over . . . so far . . . so far that his head turned somersault; and . . . and . . . so he fell . . . he fell . . . (やつは身をのりだし . . . やつは . . . 身をのりだし . . . のりだしすぎて . . . 頭からとんぼがえりをして . . . : で . . . : ドボンと落ちてしまった . . . ) の箇所は、花袋訳によると、

## HAPPINESS.

It was tea-time before the appearance of the lamps. The villa commanded the sea; the sun, which had disappeared, had left the sky all rosy from his passing—rubbed, as it were, with gold-dust; and the Mediterranean, without a ripple, without a shudder, smooth, still shining under the dying day, seemed like a huge and polished metal plate.

Far off to the right the jagged mountains outlined their black profile on the paled purple of the west.

We talked of love, we discussed that old subject, we said again the things which we had said already very often. The sweet melancholy of the twilight made our words slower, caused a tenderness to waver in our souls; and that word, “love,” which came back ceaselessly, now pronounced by a strong man’s voice, now uttered by the frail-toned voice of a woman, seemed to fill the little *salon*, to flutter there like a bird, to hover there like a spirit.

Can one remain in love for several years in succession?

“Yes,” maintained some.

“No,” affirmed others.

We distinguished cases, we established limitations, we cited examples; and all, men and women, filled with rising and troubling memories, which they could not quote, and which mounted to their lips, seemed moved, and talked of that common, that sovereign thing, the tender and mysterious union of two beings, with a profound emotion and an ardent interest.

花袋は、「オッド・ナンバー」の中から、モーパッサンの短篇をもう一つ訳した。「コルシカ島」である。原作は“*Le Bonheur*”（幸福）である。この作品は一八八四年三月に『ゴロワ』紙に発表された。英訳の表題は、“*Happiness*”となっている。將軍の令嬢が下士官と恋に陥り、許されぬためにコルシカ島に駆け落ちし、そこで仲よくしあわせな生涯を送ったという話。

「コルシカ島」の原文の冒頭は、つぎのようなものである。

「かう凭り掛つて……かういふ風にして……それでも止めずに（創作的加筆）、まだく頭を先に深くく凭りかゝつて行つて……そして不意に筋斗かへりを打つて……落ちて了つたんだ……落ちて了つたんだ……」となっている。この訳は必ずしも悪くはない。

He was strangled by emotion, he could say no more. If he had only known! は、「かれは感きわまって、もうそれ以上口がきけなかった。もしか

れが真相を知ったならば……」といった意である。が、花袋はHe was strangled by emotionの箇所を訳さなかった。

\*



### コルシカ島

田山 花袋譯

(一)

火どもし前、晚餐果てて後、茶に向ひし時の事ありき。旅館の恰も大海に臨みて已に落ち行きたる夕日の餘照の、今しも金泥と散したるやうに、澄々と赤く美しく天末と染め出したるが、微波だに起らざる地中海の、猶その絶々ある夕照の光と受けて、滄々として滑かにわれ等の眼下にひろがりわたれり。その横ざまから磨きたる大ざる金屬製の器皿と見たるがごとし。

遙かに右の方には、黒き姿と薄紫の西の空に劃したる、銀の齒のごとき山々見ゆ。

われ等互に懇と語り、その舊き問題と論じ、併せて又已に久しく幾度も繰返されたるこの同じ事と語り合ひぬ。

「火ともし前」は、家庭におけるランプなのか、それとも街灯なのかはつきりしない。「晚餐果てて後」は、創作的加筆であり、原文に該当するものはない。この句につづく訳文は、必ずしも悪くはないが、花袋は原文を句切ることなく臭のながい文にして訳している。The villa commanded the sea は、「別荘から海がみえた」とでも訳せるが、花袋は「旅館は恰も大海に臨みて」と訳している。かれまた Villa を「旅館」(やどや)と訳しているが、やはり「別荘」の語を当てるべきであらう。副詞の「恰も」は不要である。

微かある物思はしら夕暮の色に、  
何處よりともなく、杳然とあたりを霞ひ来て、それとなく語る言葉と後かちらしめ、それとなく無限のやましまと五の胸に散はしめぬ。かくて「戀」ぞいなる言葉の、時に強き男の聲に、時にやさしき女の聲に繰返されて、此處に鳥の飛ぶが如く、彼處に魂の消遙ふごとく絶えをその一室の中に、満ちたりと。

「然りと一人のふよ。」

「否」と他の一人が、斷定したるやうにちよ。

われ等の事情と示し、例外と擧げ、適例と取りぬ。

否滿座の八——男も女も皆互に経験したる適例と思出して、此處に打明けて語りたくと思ひながら、そと敢てとる事能はるに、口元をで出づるく抑へつ、深き感動と多き興味とを以て、この普通にして神聖なる、やさしくして不可思議なる両性の一致といふ事とかり合へり。

We talked of love は「われ等は互に恋を語り」ではなく、「恋について語った」と訳すべき所でござろう。We discussed that old subject は「花袋訳では「その旧き問題を論じ」となっている。old は「昔ながら」もしくは「昔からある」の意である。

“Yes”, maintain some の箇所は、『然り』と一人はいふ」と訳されている。Some は「一人」でなく、「……する人もいる」の意である。some は「……は、つぎの行の others と対照的に用いられている。“No”, affirmed others (それはむずかしい」と、きっぱりいう者もいる)は、『否』と他の一人は、断定したるやうにいふ」と訳されている。

We distinguished cases, we established limitations, we cited examples; and all, men and women, filled with rising and troubling memories, which they could not quote, and which mounted to their lips, seemed moved, and talked of that common, that sovereign thing, the tender and mysterious union of two beings, with a profound emotion and an ardent interest. この英文は、「わたしたちはいろいろな場合を区別し、いろいろな限界をきめ、またいろいろな例を引いた。そして、その場にいる者は皆——男も女も、さまざまな悩ましい想い出がよみがえり、それを引き合いに出せずにはいた。だれもが感動したようであり、男女を結びつけているありふれた、最高の恋、やさしくて、神秘的な結びつきについて語り、深い感動と熱い興味をしめした。」とでも訳せる。

and all, を花袋は、「満座の人」と訳しているが、これはうまい訳である。しかし、「男も女も皆互に経験したる適例を思出して、……それを敢て……に」までは意識されている。union of two beings は、「両性の一致」と訳されているが、すっきりしない訳である。つぎに巻末の一節をひく。

The story-teller was silent. A woman said :

“All the same, she had ideals which were too easily satisfied, needs which were too primitive, requirements which were too simple. She could only have been a fool.”

Another said, in a low, slow voice, “What matter ! she was happy.”

And down there at the end of the horizon, Corsica was sinking into the night, returning gently into the sea, blotting out her great shadow, which had appeared as if in person to tell the story of those two humble lovers who were sheltered by her coasts.

「花袋訳」

(三)

語り終りて、老紳士の黙しぬ。不意に一人の女の聲ぞして、「それを、その何の意味も無き事あり。只かの女があまり容易く満足するべき願ひ、あまり幼稚なる要求をあまりに單純する所望とて有したるが爲めのみ。恐らくかの女の愚かざるものにてありしをらん。」

それに答へしり、低く嘆しある他の聲ありき。「それをその何ぞ關すべき。少くともかの女の幸福ありしものぞ。」

かくてこの海岸に隠れたる二人の戀人の話と、自ら語らんと思ふ如くに、俄かに顯れ出でたるコルシカの島に、次第に水平線の果ての果てに隠れ行きて、この大なる影も、遂に夜の色の中に沈みて見えをかりぬ。

(畢)

「不意に」は、たとばのあやとして添えたものか。 All the same, she had ideals which were too easily satisfied, needs which were too primitive, requirements which were too simple. She could only have been a fool. は、「それにしても、彼女の理想はけつして高いものではありませんね。要求も単純すぎますわ。それではばかな女だというほかありません」とでも訳せそうだが、この部分の花袋訳は自由訳にちかい。

What matter! She was happy (はか呼ばわりされても平気です。彼女はしあわせだったのですから) は、花袋訳だと、「されどそは何ぞ関すべき。少なくともかの女は幸福なりしものを」と訳されていて、いささか意味がよく通らない。 those two humble lovers who were sheltered by her coasts (この島にかくまわれた二人のつつましかな恋人) は、「この海岸に隠れたる二人の恋人」と訳されている。

このさいこの一筋は、頭から訳さず、うしろからひっくり返って訳している。苦しい訳法である。

花袋が訳したモーパッサン物のさいこは、「散歩」(Abandoned「捨てた子」)である。この作品は、一八八四年八月『フィガロ』紙に掲載された。物語は不義の子をもつ老婦人が、約四十年ぶりに老友とともに里子に出した息子に会いに行くが、マルセーユにいるその者ががさつな牛乳屋にな



っているのを知り、あいそがつき逃げ帰ってくる話。

花袋が「散歩」を訳すとき利用したのは、五十銭本の<sup>(13)</sup>After-dinner Series（「食後シリーズ」）というひじょうに粗末な版本のうちの二冊であった。かれはこのシリーズ本を丸善の二階に備えてある書目（カタログ）のなかで見つけ、歓喜するのである。そして直ちに注文した。

ある日、私は丸善の二階へ行った。そしていつものように、そこに備えられた大きな目次の書を借りてそれを<sup>ひるがえ</sup>翻していた。ふと、モウパッサンの『短篇集』が十冊か十二冊、安いシリーズで出版されてあるのを発見した。何とも言われず嬉しかった。私は金のことなどを考えずにすぐ注文した。

注・『東京の三十年』。

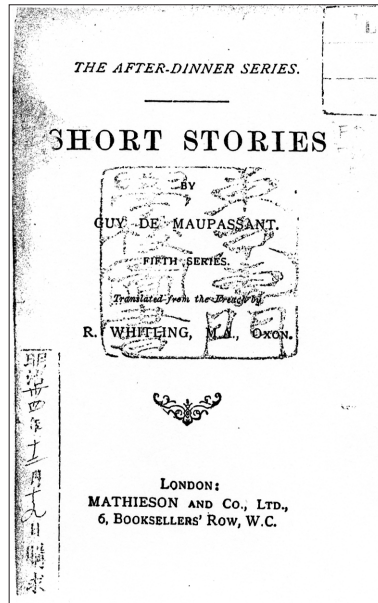
そしてこの版本が日本に到着したのは、明治三十六年（一九〇三）の五月十日ごろ（花袋の記憶ちがい、じっさいは明治三十四年六月ごろ）のことという。<sup>(14)</sup>

当時、花袋は博文館で雑誌『太平洋』を編輯<sup>へんしゅう</sup>していた。丸善から電話でそれを知らされると、もういても立ってもいらなかった。が、その代金を払う金がなかった。そこで出版部長の内山正如に泣きつき、『美文作法』を書く金（印税）のなかから十円前借して、降りしきる雨について丸善へむかった（前田晃「花袋氏と読書」『明治大正の文学人』所収、日本図書センター、昭和58・4）。

安いシリーズで、汚い本であったけれど、それがどんなに私を喜ばしたのであろう。ことに、この十二冊の『短篇集』の日本での最初の読者であり得るということが、堪<sup>たま</sup>らなく私を得意がらせた。私は撫<sup>な</sup>でたりさすたりした（田山花袋作『東京の三十年』）。

花袋がモウパッサンの短篇全集のやすい叢書を見つけ、有頂天になった<sup>(15)</sup>「食後シリーズ」の版本十二冊は、こんにちそれ入手することは容易ではない。が、現在早稲田大学中央図書館に十一冊（第一巻のみ欠）架蔵されている。同シリーズのモウパッサンの英訳短篇集は、逐次刊行されたものであるが、花袋は明治四十年（一九〇七）ごろ十七巻の全集を入手したものらしい。この十七巻本は、遺嗣子・田山瑞穂氏が所蔵している<sup>(16)</sup>という。また扉に「花袋」といった蔵書印が押してある、この英訳短篇集三冊を大事にしているのは、元博文館で花袋の同僚であった前田晃であ

「散歩」の原文の冒頭と花袋訳は、つぎのようなものである。



76U	
5	
CONTENTS.	
—:0:—	
MAD ... ..	1
AN UNFORTUNATE LIKENESS ... ..	45
THE NEW SENSATION ... ..	49
THE VIATICUM ... ..	55
THE RELICS ... ..	61
THE THIEF ... ..	68
A RUPTURE ... ..	75
A USEFUL HOUSE ... ..	79
THE ACCENT ... ..	84
GHOSTS ... ..	90
CRASH ... ..	98
AN HONEST IDEAL ... ..	102
STABLE PERFUME ... ..	110
THE ILL-OMENED GROOM ... ..	115
AN EXOTIC PRINCE ... ..	123
VIRTUE IN THE BALLET ... ..	130
IN HIS SWEETHEART'S LIVERY ... ..	137
DELILA ... ..	145
A MESALLIANCE ... ..	153
BERTHA ... ..	163
ABANDONED ... ..	176

「散歩」の原書“Abandoned”が収録されているのは第五巻である。東京専門学校（早稲田大学図書館）は、明治三十四年（一九〇二）十二月十九日に同書を購求している。この五巻には、短篇が二十一篇が入っている。Abandoned（「捨て子」）はいちばん最後に収録されている。

“I really think you must be mad, my dear, to go for a country walk in such weather as this. You have had some very strange ideas for the last two months. You take me to the sea side in spite of myself, when you have never once had such a whim, during all the forty four years that we have been married. You chose Fécamp, which is a very dull town, without consulting me, in the matter, and now you are seized with such a rage for walking, you who hardly ever stir out on foot,

that you want to go into the country on the hottest day in the year. Ask d'Apreval to go with you, as he is ready to gratify all your fancies. As for me, I am going back to have a nap.”

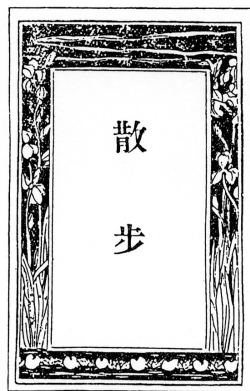
Madame de Cadour turned to her old friend and said:—

“Will you come with me, Monsieur d'Apreval?”

He bowed with a smile, and with all the gallantry of bygone years:—

“I will go wherever you go,” he replied.

“Very well then, go and get a sun-stroke,” Monsieur de Cadour said; and he went back to the *Hôtel des Bains*, to lie down on his bed for an hour or two.



モウバツサン作  
田山花袋譯

『今前は本當に何うも爲たのぢやないか、この暑いのには田舎道を散歩しやうなどいふのは！一體先今月あたりからぢ前は何うも少し暑ぢや。私が違つて留めるの聞かずに、無理に海岸に違つて来たのさへ、結婚して四十年來例の無い程の珍らしい事ぢやの死、私には少しも相談も爲すに、フエカシなどいふ此様田舎のつまらぬ町を選んで、ろしてあまげに、平歩いた事なども無い體で、あの果敢、一年中最も暑い日の日中に田舎に散歩に行かうなどは、何うしても正

氣の沙汰とは思はれん。けれど違つて行かうと言ふのなら、ダフルブアルさんに一歩に往つて貰はつしや、ダフルブアルさんは何でもお前の望み通りに爲て呉れるから……私は、私に其間に宿に歸つて、午睡でも爲て、待つて居るぢや」カドール夫人は傍なる普朝球の老いたる友の方に振返つて、そして言つた。

「ダフルブアルさん、行つて下るるか」渠は微笑を含んだまゝ、點頭くやうに頭を少し下げたが、若し用はさぞ美男子であつたらうと思はれる名残のうるはしさを其体度に顯しながら、

「貴女の行けと仰しやる處なら、何處へても……」と答へた。

「それぢや、行つて登亂にでも爲つて来るぢや」とモツシエ、ドエ カドールは言つた。

そして少時すると、渠は一二時間臥床の上に構つて、午睡の夢に耽るべく、兼ねて宿して居る「オーテル、ア、バシ」の方へと歸つて行くのであつた。

「私が違つて留めるのも聞かずに」は、創作的加筆。 You take me to the seaside in spite of myself (いやだといっているのに、わたしを海岸へひっぱり出して) は、「無理に海岸へ違つて来たのさへ」と訳されている。「遣る」は、本来「行かせる」の意である。 you have never once had such a whim (お前はそんな気まぐれを一度もおこしたことがなかった) は、「……の珍らしい事ぢやの」を意識されている。「此様田舎の」は、創作的加筆。

d'Apreval (ダブルヴァル) は、「ダブルヴァル」と表記されている。 Madame de Cadour (ド・カドール夫人) は、「カドール夫人」となっている。 With all the gallantry of bygone years は、「むかし風のいんぎんさまで」とても訳せそうだが、花袋は「若い時はさぞ美男子であつたらうと思はれる名残のうるはしきを其体度に顯しながら」と訳しているが、これは翻案もしくは自由訳にちかい。

go and get sun-stroke は、「太陽の直射光線を浴びに行く」ほどの意だが、花袋は sun-stroke (日射病) を「霍乱」(日射病の意) といった古風

な語を用いている。「そして少時すると」は、創作的加筆。  
つぎに巻末の一節をひく。

They returned slowly, without speaking a word. She was still crying; the tears ran down her cheeks continually for a time, but by degrees they stopped, and they went back to Fécamp, where they found Monsieur de Cadour waiting dinner for them, and as soon as he saw them, he began to laugh, and exclaimed:—  
“So my wife has had a sun-stroke, and I am very glad of it. I really think she has lost her head for some time past!”  
Neither of them replied, and when the husband asked them rubbing his hands:—

“Well, I hope that at least you have had a pleasant walk?”  
Monsieur d'Apréval replied:—  
“A delightful walk, I assure you; perfectly delightful.”

THE END.

〔花袋訳〕

二人は徐かに歸路に就いたが、しかもあれ以外に何一言をも交さなかつた。妻は猶絶えず歩きながら敬慮して居るので涙は一しきりその兩頬を濡のごとく傳へ落ちた。けれど少時するとそれも全く收つた様子でフェカン（Fécamp）の町近く來る頃にはもう其涙の痕をその兩頬に認める事も出来なくなつたのである。旅亭に歸つて見ると、モツシユ、ド、カドールは並壁の車に頻りにかれ等の歸り來るのを待ち居びて詫る處であつた。二人の姿を見るや否、淫面（淫面）に笑を含んで。

「何うじや罹亂（罹亂）にても取付かれて來たか？ りれも結構かも知れんぢや。二三月前から前はもう餘程何うかして居るぢやから」

と妻に向つて言つた。

けれど二人はそれに答へやうとも爲なかつた。モツシユ、ド、カドールは手を摩りながら、猶押返して、

「うれて一体何うぢやつた！ 些とは面白かつたかな？」  
と訊ねると、ダフルマルはさう手持無沙汰らしく、狼狽（狼狽）して、

「お、中々面白く散歩でした。本當に、うれや、中々面白く……」  
(終)

「瀧のごとく」は、誇張的な加筆部分。「もう其涙の痕をその兩頬に認める事も出来なくなつたのである」は、創作的加筆。for some time past (しばらくまえから) は、「二三月前から」と訳されている。「猶押返して」は創作的加筆。この語の意味は、相手のことを押しつける、である。「さも手持無沙汰らしく、狼狽して」は、創作的加筆。A delightful walk, I assure you; perfectly delightful は、「たしかに、たのしい散歩でした」。

申し分のないものでした」とでも訳せそうだが、花袋はこの一文を「ほんとうに中々面白い散歩でした。本当に、それア、中々面白く……」と訳している。

岡山のひと近松秋江（二八七六〜一九四四、明治・大正期の小説家・評論家、東京専門学校卒）は、通学の毎朝九時ごろ、田舎銘仙の羽織を着、紫のメリンス（やわらかく織った毛織物）に本を二、三冊包んで歩いている「無骨な大男」とときどき会った。目つきは人を圧迫するようであり、人相もあまりよくなかった。その大男は、だれであろう、喜久井町から本町の博文館にかよう、田山花袋その人であった<sup>(17)</sup>

花袋は「食後シリーズ」のモーパッサンの短篇集を入手後、博文館に通うとき、それをポケットに入れて行った。編輯の余暇に、車の上でも、床のなかでもモーパッサンをよむことに没頭した。モーパッサンを発見したのち、かれの思想と眼と肉体は、この十二冊の『短篇集』にすっかり打たれた。

『英語青年』第六三巻第六号「昭和5・6」は、花袋の死を報じた。いわく――

昭和五年（一九三〇）五月十三日午後四時ごろ――田山花袋は咽喉癌により逝った。享年六十歳であった。氏はキーツ詩集の訳を出したが今は絶版である。

『英語青年』の「片々録」が、一文学者の死を伝えるのは珍しいが、花袋がキーツの詩集を刊行したからであろう。自然主義を代表する作家の花袋は、モーパッサンの短篇を三篇訳した以外に、イギリスのロマン派第二期の詩人、ジョン・キーツ（一七九五〜一八二一、馬丁の子に生まれのち開業医の免許をうるが詩人に転向）の詩を二三篇訳した。それは隆文館発行の訳詩叢書のうちの一冊『キーツの詩』「明治38・10」である。この訳詩集は、上田敏の『海潮音』が刊行された年と期をおなじくしている。またこの訳詩集は、『花袋全集』に収録されていない。雑誌『文藝倶楽部』や『新潮』の「新刊紹介」に、花袋訳『キーツ詩集』は取りあげられた。前者に掲載されたものは、左記のようなものである。

▲キーツの詩▼ 詩人キーツ氏に私淑  
せる田山花袋氏が、其詩集中の粹を抜きて、  
忠實に翻譯せられたるもの、體裁瀟洒にし  
て好個机上の侶となすべし。(京橋尾張町隆  
文館發兌、定價金五拾錢)

注・『文藝俱樂部』(第一二卷第一五号所収の「評林」、明治38・11)。

後者は、『新潮』(明治38・11)の「新刊紹介」に、

▲キーツの詩

田山花袋譯

と、紹介されたものである。紹介記事をかいた記者によると、キーツは例の晦渋なる「エンデミオン」をもって天下幾多の読者を困らせたイギリスの大詩人だという。いまその訳詩集を読んでみたところ、調べは莊重であり、適切な辞句を選んだ苦勞の跡がみとめられるという。このような好意的な批評とは反対に、皮肉に満ちた批評も現れた。それをいまのやさしい言葉に直していうと、つぎのようになる。

田山花袋氏が訳した『キーツの詩』を、甥がさっそく一冊もとめたので、拾い読みしたところ、どこかの国の語法で訳したものかとおもった。なんとまあ、キーツは亡くなったのちも、日本人から虐待(ぎやくう) (むごい扱い) をうけるとは気の毒なことである。『ラ、ベル、ダム、サンの恵』の文字などは、とくに人をびっくりさせるものである。この書の広告にあるように、花袋氏がキーツの詩を多年心読されたこと、誠に奥ゆかしくおもいます。

注・『明星』(第一二号所収、明治38・1)。

またつぎに引く、茅野蕭々(一八八三〜一九四六、歌人・詩人・ドイツ文学者、慶応義塾大学、日本女子大学教授)の講評になると、みそく

そにけなした辛らつな批評である。それを現代ふうにい直すと――

誤植といえは全篇みな誤植である。誤訳といえは全篇みな誤訳である。東京で刊行される出版物のなかで、このように無能有害なるものはひじょうに珍しい。(中略) 本書を通読してみたところでは、花袋氏は英語を知ってはいない。(中略) あえて直言させていただくと、『キーツの詩』全篇を再訳せられよ。そして本書を絶版にするべきである。

注・『明星』(第十二号、明治38・12)。

はたして花袋の『キーツの詩』は、すべて誤訳であったのか。かれは英語を知ってはいなかったのかどうか。これらの疑問に答えるには、じつさいのかれの訳しふりを検証する必要がある。

たとえば、「ヒナギクの歌」(*Daisy's Song*) から一部引いて、花袋の訳技をみてみよう。

### DAISY'S SONG

1

The Sun, with his great eye,  
Sees not so much as I ;  
And the moon, all silver-proud,  
Might as well be in a cloud.

2

And O the spring — the spring  
I lead the life of a King !  
Couch'd in the teeming grass,  
I spy each pretty lass.

3

I look where no one dares,  
And I stare where no one stares,  
And when the night is night,  
Lambs bleat my lullaby.

\**The Poemes of John Keats*  
Edited with an introduction  
and notes by E.de Sélincourt,  
Methuen and Co., London, 1905,  
p.260より引用。

この原文にたいする花袋訳は、つぎのようになっている。

野菊の歌へる

一

天津日、其眼は輝く、  
しかすがに見えず我が如、  
月、しろがね、照るや誇耀  
しかすがに雲こそ懸れ。

二

あ、春——さなり春や、  
帝王の世も如かめやも  
繁る草葉絶間よりぞ、  
つね見るや、はしき少女子

三

人知らぬものを知り、  
世の見得ぬものをも見る  
あ、かくて夜の近づき  
聞くや、羊の睡眠歌

花袋は「The Sun」を「太陽」とは訳さず、「天津日」といった古語を用いた。And the moon, all silver-proud, might as well be in a cloud (そしてお月さまは、銀色の輝きを誇ったところで、雲がかかっているも同じ) の意である。「誇耀」は漢語であり、「誇りかがやかす」意である。「かすが」(春日) は、大和国春日部郷(いまの奈良の中心) の意である。I lead the life of a King は「わたしは王様ぐらしをしている」の意であるが、



花袋は「帝王すめらぎの世も如しかめやも」と、やゝ誇張的に訳している。「絶問たえま」とは「切れ問」の意か。teeming grass の訳としては、「繁る草葉」はよいとしても、couchid (横たわって) の語は抜けている。pretty を「はしき」と訳しているが、これは「いとしい」意で用いたものである。

この四行詩をちょっと読んだだけでも、すぐ意味を取るのが容易ではない。やや解りにくい訳文である。古語や漢語を用い、雅文体で訳されているが、かならずしも悪訳ではない。

しかし、「ラ、ベル、ダム、サンめぐみの恵」(La Belle Dame Sans Merci) や「希臘古瓶賦」(Ode on a Grecian Urn) の訳文において、少なからず意味不明な箇所や誤訳や稚拙な訳がみられるという(秋山勇造『翻訳の地平―翻訳者としての明治の作家』翰林書房、平成七年一月)。

花袋は栃木の館林の人である。田山家は小祿ながら代々秋元藩士であった。兄弟は多いうえに家は貧しかった。少年のころ漢学塾で漢詩文を学び、明治二十年(十七歳)ごろ、野島金八郎(大学予備門生)から英語の手ほどきをうけ、翌年神田仲猿楽町の「日本英字館」で英語を学んだ。同二十三年(一八九〇)九月、日本法律学校(いまの日本大学)に入るが、数ヶ月で退学した。学歴らしいものは、とくになかったが、国漢の素養や和歌にかけては相当なものであったと思われる。外国語としては、英語のほかにドイツ語を学んだようであるが、これは独学であったのであろう。花袋はじゅうぶんな学こそなかったかもしれないが、ひじょうに豊かな天分に恵まれていた。だからかれは文苑において成功することができた。

人間は学問がよくでき、有名な学校を出たところで高が知れているのである。その道で一家をなすには、努力と天分と運に負うところが少くない。学校秀才が必ずしも大成するとは限らない。学問だけに限らず、芸術や文学においては、天分のないものはとうてい成功することができない。

\*

## 上田敏びん

文学の研究にしたがう者は、「細心精緻の学風」を堅持するよう説いたのは、訳詩集『海潮音』(本郷書院、明治38・10)をもって人心を風びした上田敏(一八七四〜一九一六、評論家・外国文学者・詩人、京都帝大教授)であった。<sup>(18)</sup>『海潮音』は独特なことばの響きと詩美において群を抜き、他の訳詩集と比ひばう伴できぬものであった。ヨーロッパ文学の紹介と移植につとめた敏もまた、モーパッサンの短篇の翻訳に手を染めている。が、英訳本によらず、フランス語から直かに訳したように思える。つぎの三点がそれである。



明治40年（1907）シカゴで撮った写真。敏（35歳）。『上田敏全集』（改造社、昭和6・7）より。

「文反古」(Le lit) ..... 『帝国文学』明治32・5  
 「みろり火」(Le Bûche) ..... 『帝国文学』明治33・12  
 「かたおもひ」(La Rempaillense 「椅子わら詰替への女」) ..... 『藝苑』明治35・2

「文反古」には訳者名がないが、上田敏が訳筆をとったことはたしかである。これは一種の雅文（優雅な文章）といおうか、かれ流の美文で訳されている。しかし、訳文はけっして読りやしくない。物語は競売で手に入れた祭服を小さなイスに張りたいたいと思って、裏地を裂いたら、そこから女性がしたためた四通の手紙が出てきたという話。それらは僧院長宛のラブレターでもあるが、その一通には寢床について書かれていた。寢台（ベッド）というものは、人生の縮図、人が生まれ、愛し、死ぬのもみんな寢台だという。

「みろり火」は、「文反古」と同様、敏の随筆および訳文集である『みをつくし』（文友館、明治34・12）に収載された。「みろり火」には、訳者の名「みをつくし」（敏のペンネーム）が付いている。物語は親友の妻（魅力のある老婦人）に客間において誘惑されかけたとき、暖炉のたきぎが客間の中に飛びこんできた。そのとき主人公は急いで立ちあがり、即座にそのたきぎを暖炉の中へもどした。ちょうどそのとき夫が帰ってきたので、ぬれ場をとり押えられずにすんだ。男はきわどいところを助かったので、その後独身を通したという話。

「かたおもひ」には、「上田敏」とだけ名が明記されている。物語は、椅子なおしの女が少女のころ薬劑士の少年をひそかに愛しつつ、やがてお互い老いてゆく。かつての少女は、いま晩年をむかえるに当って、二千数百フランの遺産をむかし愛した相手に贈るのだが、その男は強欲で情のない男であった。

敏は「文反古」の原文の冒頭を四節ほど省略し訳さず、第五節あたりから訳している。つぎに引く原文がそれである。

« Mon ami, je suis malade, toute souffrante, et je ne quitte pas mon lit. La pluie bat mes vitres, et je reste chaudement, mollement rêveuse, dans la tiédeur des duvets. J'ai un livre, un livre que j'aime et qui me semble fait avec un peu de moi. Vous dirai-je lequel? Non. Vous me gronderiez. Puis, quand j'ai lu, je songe, et je veux vous dire à quoi.

« On a mis derrière ma tête des oreillers qui me tiennent assise, et je vous écris sur ce mignon pupitre que j'ai reçu de vous.

« Étant depuis trois jours en mon lit, c'est à mon lit que je pense, et même dans le sommeil j'y médite encore.

« Le lit, mon ami, c'est toute notre vie. C'est là qu'on naît, c'est là qu'on aime, c'est là qu'on meurt.

« Si j'avais la plume de M. de Crébillon, j'écrirais l'histoire d'un lit. Et que d'aventures émouvantes, terribles, aussi que d'aventures gracieuses, aussi que d'autres attendrissantes! Que d'enseignements n'en pourrait-on pas tirer, et de moralités pour tout le monde!



Guy de maupassant; *Mademoiselle Fifi*, illustrations de L. Vallet, Albin Michel, 1940 より。



文反古

こゝちなやましよう床はなれがたく、窓には時雨、毛蒲團のあたゝかきに、熱すこしありて、うつら／＼夢見くらし侍り、枕もとのふみも、身にひきあてゝをかしく、其名きこえあ々べきか、いなしかり給はむもあそろし、よみはてゝまた思ひ沈みぬ。さればすこしつげまゐらせむ。

そりに枕かはせ、起きなほりて、いつぞや給ひし小机を臺にて此文かきまゐらす。床をひきてよりけふ夜に三日なれば、あつから此床をこそ考ふれ。夢のうちもなほこれと思ひ侍り。

君よ、げに床こそ人の一生なれ、生るゝもこゝ戀ふるもこゝ死ぬるもまたこゝなり。われにぞ、くれび、ぶんぬしの筆あらば、床のはなしといふものかゝまほしや、驚かれぬるあそろしのこと、えんなること又心動すこと幾何ぞ、何れの誠かこゝよりひきいだしき、あらむ衆生の教こゝに籠れり。

「こゝちなやましよう」は、創作的加筆。je reste chaudement, mollement rêveuse, dans la tiédeur des duvets (わたしは綿毛のぬくもりの中で、ぬくぬくと、ゆったりと夢想にふけております) は、「毛蒲團のあたゝかきに、熱すこしありて、うつら／＼夢見くらし侍り」と訳されている。これは意訳である。

J'ai un livre, un livre que j'aime et qui me semble fait avec un peu de moi. Vous dirai-je lequel? Non, Vous me gronderiez. Puis, quand j'ai lu, je songe, et je veux vous dire à quoi (わたしは書物を一冊もっております。大好きな書物です。その本にわたしのことが少し書かれています。どうですか?)  
 どのような本ですって? いいえ、教えられません。おしかりを受けますから。読んでしまったら、考えてみましょう。何を考えるか、教えてさしあげます) は、敏訳だと「枕もとのふみ(書物)——引用者)も、身にひきあててをかしく(我が身に押しあてるのもこっけい——引用者)、其名

(書名——引用者) きこえあぐべきか (申し上げるべきか——引用者)。いな。しかり給はむもおそろし。よみはてゝまた思ひ沈みぬ。さればすこしつけまゐらせむ (少しだけ教えて差しあげましょう——引用者) となっている。

「枕もと…」 「身をひきあてゝ」は、原文にないことを補ったものである。訳文は原文から大きくそれてはいない。On a mis derrière ma tête des oreillers qui me tiennent assise (頭のうしろに枕を入れてもらったので、体をおこしていられる) は、「えり(えり首——引用者)に枕かはせ、起きなほりて」と訳されているが、これはとくに問題はない。「くれびよんぬしの筆あらば、床のはなしといふものかゝまほしや」は、クレピヨンさんほどの筆力がわたしにあったなら、寝台の話を書きますものを、の意である。「……幾何ぞ」は、「どれほど……するか」の意である。

d'autres attendrissantes (その他ほろりとさせるもの) は、訳されていない。Que d'enseignements n'en pourrait-on pas tirer (そこからたくさんの教訓が得られる) は、「何れの誠(真理——引用者)かこゝよりひきいだしえざらむ」と訳されている。つぎに巻末の一節をひく。

« Que d'autres choses me sont encore venues !  
mais je n'ai le temps de vous les marquer, et puis  
me les rappellerais-je toutes ? et puis je suis déjà  
tant fatiguée que je vais retirer mes oreillers,  
m'étendre tout au long et dormir quelque peu.  
« Venez me voir demain à trois heures ; peut-  
être serai-je mieux et vous le pourrai-je montrer.  
« Adieu, mon ami ; voici mes mains pour que  
vous les baisiez, et je vous tends aussi mes lèvres. »

【敏訳】

思ひしことなほさはあれど、かいつけむひまもなく又すべて思ひ浮ぶるもむづかし。つかれたれば枕はずしてあほむきに少しねむらむどこぞ思ひ侍れ。

明日三時尋ね給へかし、病ふこたりて君を御見ることかなはむ。  
さらば、さらばわか君、くちづけしたまふ爲にこの手さしのべたり。また此唇をこそ  
ささとはがりに。  
(もゝばんさん作)

「かいつけむひま」とは、「お知らせするひま」の意。et puis (おまけた) は、訳されていない。vous le pourrai-je montrer (よくなつた証拠を

LA BUCHE

Le salon était petit, tout enveloppé de tentures épaisses, et discrètement odorant. Dans une cheminée large, un grand feu flambait ; tandis qu'une seule lampe posée sur le coin de la cheminée versait une lumière molle, ombrée par un abat-jour d'ancienne dentelle, sur les deux personnes qui causaient.

Elle, la maîtresse de la maison, une vieille à cheveux blancs, mais une de ces vieilles adorables dont la peau sans rides est lisse comme un fin papier et parfumée, tout imprégnée de parfums, pénétrée jusqu'à la chair vive par les essences fines dont elle se baigne, depuis si longtemps, l'épiderme : une vieille qui sent, quand on lui baise la main, l'odeur légère qui vous saute à l'odorat lorsqu'on ouvre une boîte de poudre d'iris florentine.

おみせできる)は、訳されていない。「病おこたりて君と御見ることかなはむ」は、創作的加筆。「いざとはがりに」は意味不明である。  
 この最後の一節は、およそ原文に沿って訳してあるので、大きなあやまちはない。訳文全体からうける印象は、モーパッサンの翻訳というより、創作文のそれである。だからモーパッサンの味わいは読者には伝わらない。「文反古」は完訳ではなく縮訳である。作品全体を三分の一ほど縮めたような印象をあたえる。

\*

「文反古」につづいて発表になった「ゐろり火」は、前作ほど読みづらくはないにしても、原文の解釈や訳文にいろいろ欠陥がみとめられる。「ゐろり火」の原文の冒頭は、つぎのようなものである。

〔敏訳〕



(禁轉載)

ゐろり火

みをつくし

あつき窓掛の客間香のにはひゆかしく、廣き暖爐には火いと熾に爐額のすみにすゑたる燈火は、なえたるれえすのかさの影より、柔き光を落して、蕭やかに語る二人を照せり。  
 あるじの女は、髪白きふうな天色の昔忍はるゝ、皺なき肌の薄葉めいたるに、年ごろの化粧染みたるか、人もしその指にくちづけなさば、ふろれんしや、菖蒲の粉おしろいの蓋あけたるかをりやすらむ。

tentures は、(ここ)では「壁布」の意であるが、敏は「窓掛」(カーテンのここ)と訳している。cheminéeの訳「爐額」はわかりにくい。いまなら「暖炉」もしくは「マントルピース」とでも訳すところである。un abat-jour d'ancienne dentelle (古風なレース飾りのついたランプの笠)は、「燈火はなえたる(くたびれた——引用者) れえすのかさ」と訳されている。「蕭やかに」は創作的加筆。une de ces vieilles adorables (すばらしい老婦人のひとり)は、「天色の昔忍はると(天性の美人をなつかしむ意——引用者)」と意識されている。「薄葉」(うすい紙の意)は、un fin papierを訳したものである。

et parfumée, tout imprégnée de parfums, pénétrée jusqu'à la chair vive par les essences fines dont elle se baigne, depuis si longtemps, l'épiderme: une vieille qui sent (よい香りがした。いろいろな香水が体中にしみ込んでいた。上等のエキスが生身にまでしみ込んでいた。彼女はそれを長年はだ洗いに使っていたのだ)の一節は、削除され、訳されていない。poudre d'iris florentine (フィレンツェ製のアイリス粉「アイリスの根茎からつくる芳香剤」)は、「ふろれんしや菖蒲の粉おしろい」と訳されているが、「ふろれんしや」はわかりにくい。つぎに巻末の一節をひく。

La bûche, oui, la bûche, madame, s'élançait dans le salon, renversant la pelle, le garde-feu, roulant comme un ouragan de flamme, incendiant le tapis et se gîtant sous un fauteuil qu'elle allait infailliblement flamber.

Je me précipitai comme un fou, et pendant que je repoussais dans la cheminée le tison sauteur, la porte brusquement s'ouvrit! Julien, tout joyeux, rentrait. Il s'écria: « Je suis libre, l'affaire est finie deux heures plus tôt! »

Oui, mon amie, sans la bûche, j'étais pincé en flagrant délit. Et vous apercevez d'ici les conséquences!

Or, je fis en sorte de n'être plus repris dans une situation pareille, jamais, jamais. Puis je m'aperçus que Julien me battait froid, comme on dit. Sa femme évidemment savait notre amitié; et peu à peu il m'éloigna de chez lui; et nous avons cessé de nous voir.

Je ne me suis point marié. Cela ne doit plus vous étonner.

#### 【敏訳】

爐火は薪は客間に飛びて火箸を仆し絨毯をやり椅子の後に落ちて、もえあがらむとす。われは狂人の如くとりみだして、終にもえさしを爐中に收めし時戸は急に開きて、ヨリヤンの笑顔あらはれぬ用はずみたり。二時ばかりはやく終れりといふ。げにこの薪なかりせば、われは現行のあかしに捕はれけむを、其結果を察し給へ。われはゆめくかゝる境に再び身をあかざるべし、其後友のにはかに冷になりしは明にかの妻のわざなるべく、會食のまねきもとだえ今は相見ることもなし。われ終に娶らず怪むべきにあらずかし、モオバッサン。

LA REMPAILLEUSE

À Léon Hennique<sup>01</sup>.

C'était à la fin du dîner d'ouverture de chasse chez le marquis de Bertrans. Onze chasseurs, huit jeunes femmes et le médecin du pays étaient assis autour de la grande table illuminée, couverte de fruits et de fleurs.

On vint à parler d'amour, et une grande discussion s'éleva, l'éternelle discussion, pour savoir si on pouvait aimer vraiment une fois<sup>b</sup> ou plusieurs fois. On cita des exemples de gens n'ayant jamais eu qu'un amour sérieux; on cita aussi d'autres exemples de gens ayant aimé souvent, avec violence. Les hommes, en général, prétendaient que la passion, comme les maladies, peut frapper plusieurs fois le même être, et le frapper à le tuer si quelque obstacle se dresse devant lui.

La bûche, oui, la bûche, madame, s'élançait dans le salon, renversant la pelle le garde-feu, roulant comme un ouragan de flamme (たきぎです。そうです。マダム、たきぎが客間の中に飛び込んできたのです。そしてシャベルや火よけ用の金鋼を倒し、火の手は嵐のごとく転って行きました)は、敏訳だと「爐火は、薪は、客間に飛びて、火箸を仆し……」と、意訳されている。le tison sauveur (我が身を救ったその燃えさし)は、単に「もえさし」と訳されている。「現行のおかしに捕はれけむ」は、わかりにくい訳である。これは J'étais pincé en flagrant délit (現行犯として捕えられるところでした)を訳したものである。peu à peu il m'éloigna de chez lui (だんだんかれはわたしを自宅によせつけなくなりました)の箇所は、「会食のまねきとだえ」と意訳されている。

\*

「かたおもひ」の原文の冒頭は、つぎのようなものである。

〔敏訳〕

かたおもひ

上田敏

ドゥペルトラン侯爵の別荘狩の始の宴のをはり、獵の人十一人若き女性八人、これに、ところの醫者なにがしをあはせて生花くだもの堆く燈火華やかなる大食卓をかこみたり。

談は愛情の事に及びて、いつしか盛なる議論となりぬ。人の一生に、眞の戀は、ただの一度なりや、はた幾たびもなりやと、論じ盡くせぬあげつらひに、あるは、切なるかたらひの天にも地にも、一度のみなりし人のためしをひき、或はいくたびとなく、劇しき思を寄せたりしほかの例をとりいでたるに、男子はおほかた、口を揃へて、愛は實に病の如し、いくたびも同人を襲ふべく、襲ひて前に障礙あらば人の命をも取るものなりと。



「別荘」<sup>しもやしき</sup>は、原文に該当するものがない。敏の創作的加筆。Le médecin du pays (地元の医師)は、「ところ(土地——引用者)の医師にながし」と訳されている。日本語の「ながし」は、わざと氏名をはっきりさせないときに用いる代名詞である。

「あげつらう」は、理否を論じる議論の意。「談(話題の意)……」から文尾までは、概ね正しい訳と思われるが、原文の句読点を無視し、息の長い文章として訳している。

つぎに巻末の一節をひく。

Il s'en allait. Je le rappelai. « Elle a laissé aussi son vieux cheval et ses deux chiens. Les voulez-vous ? » Il s'arrêta, surpris : « Ah ! non, par exemple ; que voulez-vous que j'en fasse ? Disposez-en comme vous voudrez. » Et il riait. Puis il me tendit sa main que je serrai. Que voulez-vous ? Il ne faut pas, dans un pays, que le médecin et le pharmacien soient ennemis.

J'ai gardé les chiens chez moi. Le curé, qui a une grande cour, a pris le cheval. La voiture sert de cabane à Chouquet ; et il a acheté cinq obligations de chemin de fer avec l'argent.

Voilà le seul amour profond que j'aie rencontré, dans ma vie.

\*

Le médecin se tut.

Alors la marquise, qui avait des larmes dans les yeux, soupira : « Décidément, il n'y a que les femmes pour savoir aimer ! »

Maupassant: *Contes et Nouvelles 1*, Gallimard, 1970より。

【敏訳】

辭し去らむとするを呼びとめて、まだ老馬と二匹の犬がありますか、御望ですかといへばたちどまりて、いや、なに、要りません、僕が持て居ても致方がないではありませんか。あなたの御勝手に拂て御仕舞なさいと笑ひ出し握手したれば、われも禮をかへしぬ。已むを得ざる事なり。狭き田舎にて醫者と藥屋とは敵たりがたし。

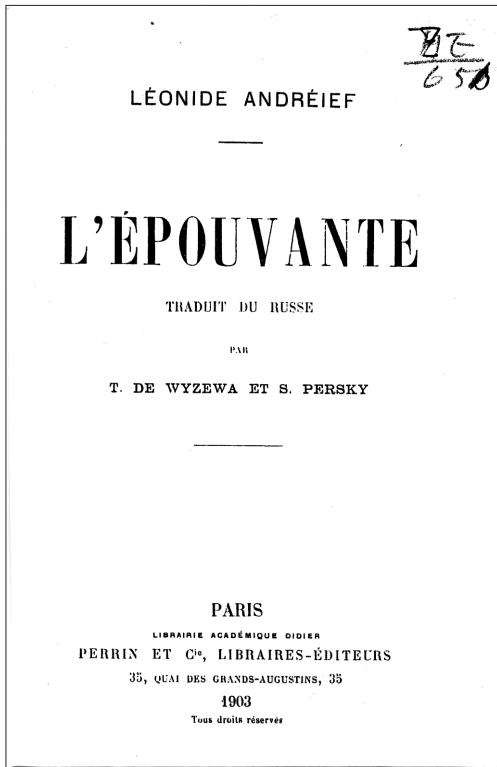
犬はわが許に養ひ置きぬ。裏に明地ありとて牧師は馬をつれゆきぬ。車はシケエの臺所となりぬ。かの金にて鐵道株五枚を求めたりといふ。

われこれまでに知りしたゞ一の戀はこれなり。

醫者はこゝに黙しぬ。

時に侯爵夫人涙ぐみ給ひてうるみ聲に、まことの情愛は女に限るものに候はずや。  
(モオバッサン)

Il s'arrêta, surpris は、「かれはびっくりして、足をとめた」の意であるが、敏は surpris (びっくりして)の語を訳し落している。cabane (小屋)は、敏訳だと「台所」となっている。l'amour profond は、「深い愛」もしくは「深刻な恋」とでも訳せるが、敏は「たゞ一の恋」と訳している。



上田敏がアンドレーエフの「心」（「思想」のこと）を訳したとき利用したものとおなじ仏訳本。〔東京大学文学部図書館蔵〕

る。

以上のごとく敏の翻訳三つを大観すると、少なからず創作的加筆、訳し落とし、意図的削除、意識部分などがみられ、原作の情趣（味わい）をじゅうぶんに伝えていないうらみがあるといえよう。

\*

文芸雑誌『文学界』（明治26・1〜同31まで刊行）の同人であった上田敏（紅顔の金ボタン姿）は、根岸における新年会の席上——北村透谷・島崎藤村・戸川秋骨・馬場孤蝶・樋口一葉・田山花袋・国木田独步・柳田国男らを前にして、「鷗外さんなんか誤訳ばかりしている。今に誤訳調べをやってやる」（花袋『東京の三十年』）と気焰をあげ、同席者をおどろかしたが、後年敏は誤訳問題の渦中に巻き込まれるのである。

明治四十二年（一九〇九）七月十五日——雑誌『無名通信』（第七号）は、「翻訳界の恥辱 『心』は誤訳以上の出鱈目訳 語学の欠乏、理解力の未熟」といった人さわがせな見出しのもとに、二段組誌面の五〜一〇頁にわたって、上田敏の翻訳——ロシアの世紀末を代表する小説家・劇作家であるアンドレーエフ（一八七一一一九一九）の中編小説

『心』（ロシア語の現代は *Mysl'*（「思想」の意）——に筆<sup>ひ</sup> 誅<sup>ちゅう</sup>を加えた。

敏の訳の欠点をあげつらい、それをでたらめな訳だ、といって責めたのは、翻訳家の昇曙夢（本名・昇直隆、一八七八〜一九五八、奄美大島に生まれ、ニコライ神学校卒。のち母校の講師となる）であったようだ。

上田敏は、わが国においてアンドレーエフを初めて翻訳した第一号であるが、アンドレーエフの作品を全部で六篇訳した。問題の『無名通信』の記事の冒頭部分は、つぎのようなものであった。

近頃東京上田敏氏の譯篇「心」を讀んで頗る失望した。で、譯文に據て原作を窺はんとする人に取て幾分かの手引ともならうと思ふから、茲に紹介旁々聊か苦言を呈して置く。實はアンドレーエフに「心」と云ふ作物の有ることは、今迄聞いたことがなかつたので、何んな作かと思つて、態々買つて讀んで見ると驚いた。是れは、と以前讀んだことのある「思想」(ムイスリ)と云ふ、アンドレーエフの作中では可也有名な象徴的作物である。日本では能く西洋作品の標題を取り違へて故意に變改するもの以外——非常に迷惑させられることがある。



昇曙夢

評者は、へき頭第一に、原題の「思想」を「心」と訳したことをもつての外の話である、と非難した。本文と関係がない、単に標題だけのことであれば、訳者のつこうで変えてもさしつかえないが、ここで「心」と訳しては、作品全体の意義を無視することになるといふ。

『心』(春陽堂、明治42・6刊、ほかに「旅行」「クサカ」の二篇も収録)は、一九〇三年(明治三十六年)に刊行されたド・ヴィンゼワとペルスキーによる、つぎのようなフランス語訳に基づいて重訳したものである。

Léonide Anderjief: *L'Épouvante*, traduit du russe par T. de Wyzewa et S. Persky, Perrin, Paris, 1903

注・この仏訳の原題 *L'Épouvante* は、「恐怖」または「不安」の意。

敏がこの仏訳を「東京の一書肆(丸善のことか——引用者)で購<sup>あがな</sup>つたのは、明治三十六年(一九〇三)の春のことであった(『心』の序文)。「無名通信」の罵倒文を書いた当人は、敏がロシアの原書から訳さず、フランス語訳から重訳したに違いない、と推測した。このことは当たっていた。フランスには古くから多数のロシア人が入り込み、フランス語を国語のように使っているから、いかがわしい英訳とはちがひ、信用の置ける訳と考えた。

アンドレーエフの「思想」という作品は、狂気をよそおった主人公が、自由思想に導びかれ、友人のサウエロフを殺す、といった話である。敏の罵倒者は、つぎの点を指弾したが、仏訳によらず、ロシア語の原書をひもといて問題箇所を抽出した。その要点をしるすと、つぎのようになる。訳者は原作者の狙いどころ、すなわち作品の中心思想をまったく理解していない。翻訳においてもっとも注意すべき点は、原作者の作意、主題をつかまえることである。これがわかっていないと、原作の調子が訳全体に移ってこない。

おどろくほどの省略法を用いている。聞きなれぬかれ一流の漢語や砕けない言葉の連発。上田氏の訳は、原作を読んだときの印象とは雲泥の差があり、まったく別物をよむような気がする。

訳文の粗漏（いい加減さ、手抜き）ときたら、てんで話にならない。はじめは全部原書と対照しようとしたが、対照どころの騒ぎではなかった。三分の一は、たしかに省略されている。原文にない、いいかげんな付け加えがある。これが翻訳なら、世の中に翻訳ほど当てにならぬものはない。翻案よりもまだ浅ましい。所々に誤訳、粗漏、臆断、誤解、省略、ごまかしがある。

雀（ウオロベイ）を燕と取りちがえた点など、訳語の当たらないのも随所に散見する。いやしくも「東京 上田敏」ともあろうものが、こんな見やすい誤訳をなさっては、小学児童の笑い草にでもなりはすまいかと冷汗が流れる。

敏が訳書『心』を出版したとき、職階は京都帝国大学文科大学教授（高等官三等）であり、西洋文学第二講座を担当するれっきとした教授であった。帝大の教授がこのように虚仮にされては立つ瀬がないが、上田敏は『読売新聞』紙上において二回（上、下）にわたって反論した（明治42・8・1、8・2）。その上の冒頭の一節は、つぎのようなものである。

### 小生の翻訳（上）

七月廿九日京都にて 上田敏

七月二十五日、二十七日の貴紙附録所載、一記者の文に依つて承知したが、小生のアンドレーエフ翻譯について、頗る激烈な罵倒文が雑誌「無名通信」に載つて居るさうだ。一應それを拝見してと思つて、京都の雑誌店三四を探したが、遺憾ながら今に手に入らない。そちこちして居るうち遅くなる

### 小生の翻譯(上)

七月廿九日京都にて 上田敏

七月二十五日、二十七日の貴紙附録所載、一記者の文に依つて承知したが、小生のアンドレイエフ翻譯について、頗る激的な罵倒文が、雑誌「無名通信」に掲載されて居る。應それを拜見して思つて、京都の雜誌店三四を探したが、遠縁ながら今に手に入らない。そちらに居る方も通くならぬから、簡短に返答する。

第一、彼の獨逸文に對して、小生から辯護する必要はもう無いやうだが、貴紙記者の判定に據れば、小生が故意に誤脱をし誤譯をした事の無いのは、明瞭であつて、かの罵倒家の評は少々無理である。進めて、かの評家の露語の智識、否、日本語の智識をさへ疑はなくてはならぬ。貴紙に據つて、一例を引く。小生が「老婆の乳のやうに、だらりとした……」(此頃見た獨逸譯にもさうある。)

「年増の胸の胸に凸凹した……」

「訂正す可しと力味んであるが、年増になるに胸に瘤が出来るか知ら。なんは露西亞でも、そんな事はあるまい。又此滑稽な評の直ぐ下に「譯者は風船の様にさうさうして」とあるのも珍妙だ。小生は

上田敏が『読売新聞』(明治42・8・1付)に発表した誤訳問題に関する反論

から、簡短に返答する。

第一、彼の罵倒文に對して、小生から辯を費す必要はもう無いやうだ。貴紙一記者の判定に據れば、小生が故意に誤脱をし誤譯をした事の無いのは、明瞭であつて、かの罵倒家の評は少々無理であると宣言はれてある。それに小生は又一步を進めて、かの評家の露語の智識、否、日本語の智識をさへ疑ひたくなつた。差當り、貴紙に據つて、一例を引くと小生が

「老婆の乳のやうに、だらりとした……」

(此頃見た獨逸譯にもさうある。)

としたのは大間違で、

「年増の胸の様に凸凹した……」

と訂正す可しと力味んであるが、年増になると胸に瘤が出来るか知ら。なんぼ露西亞でも、そんな事はあるまい。又此滑稽な評の直ぐ下に「譯者は風船の様にさうさうして」とあるのも珍妙だ。小生は何も翻譯で皮肉を言はうとはせぬ。日本語で「當擦る」とは暗に誹る事である。かういふ評家とお對手は御免蒙る。

敏によると、明治の国語は洗練彫琢(せんれんちゆうたく) (みがきのかかったもの) が必要であるという。かれは言語学でいう純粹主義——用語を純正にしたいと思つた。かれが外国文学を翻譯した動機というのは、この目的のためであつた。

「思想」を直訳せず、「心」としたのはいろいろ勘考のうえのことという。仏訳によつたこの翻譯は、他に文芸としてすぐれた良好の翻譯が出るまで、それ相応の役を果たすものである、と明言した。語系の異なるいまの新作家の短編を移植するとき、なぜ術学的な「逐語訳」にこだわる必要があるのか。シュレールゲル訳のシェイクスピア、イギリスのコールリッジやロゼッチらの詩の訳業にしても忠実なしごとではない、といつて反論した。

これにたいして『無名通信』(明治42・8・13付)は、「小生の翻譯」を讀みて上田敏に答ふ」と題す

る論駁記事を出した。冒頭記者（執筆者は昇曙夢であろうが）は、このあいだ上田敏氏は、『読売新聞』に「小生の翻訳」と題して、弁解文のよ  
うな、そうでないような、きわめて不得要領な（わけがわからない——引用者）人名辞書体のもを書いて、逃げるように退却した。逃げた者を  
さらに追撃する必要もないと思ったが、『かういふ評家とお相手は御免蒙る』というずうずうしい遁辞に対しては、そのまま見のがすわけには  
ゆかぬ、と書いた。

上田氏は、誤解の指摘とは縁もゆかりもない、わたしの日本語の誤りをたいそう仰山らしく指摘しておられるが、鬼の首を取ったようにうれし  
かっただろうが、あいにく狙ひ所がちがっている。

わたしはけっして一語一語の附加、脱落、すこしばかりの差異をひろったのではない。多くは全体の文句として、文章としてはなほだしき誤  
訳、誤脱、誤解、粗漏の数々を指摘し、あわせて作品の主題が訳者にじゅうぶん了解されていないということをいったのである。

上田氏はじぶんにつごうよさそうな外国の事例を勝手に引いて、「逐字訳必ずしも忠実訳にあらず」「国語の約束に依つて多少の取捨は容してあ  
る」といわれている。これに対しては、ある程度までは同意見だが、唯ひとり上田氏の『心』のいみは逐字訳、非逐字訳の差別以上に超然として、  
取捨選択の標準をもって到底律しがたきものである。

本誌の批評は、誰がみてもわかる通り、けっして罵倒でも何でもない。事実ありのままを少しも誇張せずに書いたものである。いくら人名を列  
ねた所で誤訳は依然として誤訳、誤脱は依然として誤脱である。以上が、論駁記事の要旨である。

この誤訳論争は、上田敏からの反応、『読売新聞』や『無名通信』側からの新たな論議もなく、幕をとじた。

『無名通信』の誤訳指摘者は、論峰するごとく上田敏に詰め寄ったのであるが、肩すかしをくらった感がある。評者は敏の訳文をロシア語の原文  
と直かに対照して議論を進めているが、敏が抛ったフランス語訳の精度を問題にせず、また仏訳とを照らし合わせていないのである。

敏が訳した『心』は、はたして数多の誤謬が指摘されるようなものであったのかどうか、「思想」のフランス語訳と訳文をつき比べて検討して  
みよう。

「心」（思想）の原文は、つぎのようなものである。

LA PENSÉE

Le 11 décembre 1900, le médecin Anton Ignatiévitch Kerjentzef commit un assassinat. Les circonstances du crime, de même que différents faits qui l'avaient précédé, donnèrent lieu de soupçonner qu'il y avait quelque chose d'anormal dans l'état mental du meurtrier.

Conduit à l'Établissement de psychiatrie Elisabeth pour y être examiné, Kerjentzef fut soumis à la surveillance minutieuse et sévère de plusieurs spécialistes expérimentés, parmi lesquels se trouvait le professeur Djémnitsky qui vient de mourir.

Un mois après son entrée à l'hôpital, le Dr Kerjentzef présenta aux experts un mémoire écrit par lui, et dans lequel il donnait des explications sur ce qui s'était passé. Voici ce document qui, joint à d'autres matériaux fournis par l'enquête, servit de base à l'expertise médico-légale :

Feuilleton n° 1

Jusqu'à présent, messieurs les experts, j'ai caché la vérité, mais maintenant je me vois forcé de la dévoiler. Lorsque vous la connaîtrez, vous comprendrez que l'affaire n'est pas aussi simple qu'elle peut le paraître aux profanes. Ce n'est pas simplement un de ces actes qui conduisent à la camisole de force ou à la mise aux fers. Il y a là quelque chose d'infiniment plus sérieux, et qui, j'ose le croire, vous intéressera d'avantage.

L'homme que j'ai tué, Alexis Constantino-vitch Saviélof, avait été mon camarade au collège et à l'université, bien que nos études ne fussent pas les mêmes; comme vous le savez, je suis médecin, et lui suivait les cours de la faculté de droit. On ne peut dire que je n'aimais pas le défunt; il m'a toujours été sympathique, et je n'ai jamais eu d'ami plus intime que lui. Mais, malgré tous ses côtés attrayants, il n'appartenait pas à la catégorie des personnes capables de m'inspirer du respect.

敏はこれをつぎのような日本語に訳した。

心

千九百年十二月十一日醫師アントンイグナチエフは人殺をした犯罪當時の様態に先づ種々の事實までが此犯人の精神状態にとこ異常の點がありさうたといふ疑念を起させた。

診斷の爲、エリザベト精神病院へ送られて経験のある多くの専門家から詳細に嚴重に取調を受けた。先日物故したシムニツキイ博士も鑑定人の一人であつた。

入院一月の後、ドクトルケルシュンツフは自分で起草した始末書を鑑定人の許へ提出して此事件の顛末を説明した。次に掲げるのが其書類である。審問の當時に集つた他の材料と共に法醫學上の鑑定に基礎となつてゐる。

第一號

鑑定人諸君、自分は今日が今日迄此事件の真相を陳述しなかつたが、今己むを得ず遂に暴露する事になつた。茲に始めて諸君は此事件が局外者の見るやうに單純で無い事に氣が付かれるであらう。これは單に狹窄衣や鐵の鎖で方が付く行爲では無い。それよりも非常に重大で又諸君には大に興味のある或物が此理にあると、自分は確信する。

自分の殺した男アレクシニコフは、自分のナリフエロフは中學以來の友人で、志す學問は互に異つてゐたが、大學に進んでもなほ交際を續けてゐた。自分が故人を愛してゐなかつたとは誰も言へまい。平常から自分とは氣のよく合つた男で、實はこれほど親密な知合は他に無つた。然しあの男は人好のする性にも拘らず、尊敬の念を起させ、人物では斷じて無い。

Je ne me souviens pas quand me vint pour la première fois l'idée de tuer Alexis, mais je sais que, dès le premier instant, elle me devint aussi familière que si elle était née avec moi. Je sais que j'avais envie de rendre Tatiana Nicolaiévna malheureuse et que, d'abord, j'ai imaginé beaucoup d'autres projets, moins périlleux pour Alexis. — Car j'ai toujours été l'ennemi de la cruauté inutile. — Grâce à l'influence que j'avais sur lui, j'espérais le rendre amoureux d'une autre femme, ou le jeter dans les excès de l'alcoolisme (il avait un penchant pour la boisson) : mais ces moyens ne valaient rien, pour cette raison que Tatiana Nicolaiévna se serait ingéniée à rester heureuse, même en le cédant à une autre femme, même en recevant ses caresses d'ivrogne. Il lui fallait cet homme, et elle serait toujours son esclave, quoi qu'il arrivât. Il y a de ces natures serviles.

注・原書の二〇二〜二〇三頁。

冒頭の第一節の訳文は、大きなあやまちはない。しかし、第三節目の主人公の「手記」(Feuille n° 1)の中には語脱がいくつも散見する。たとえば敏は、à l'université「大学時代の……」や comme vous le savez, je suis médecin, et lui suivait les cours de la faculté de droit「承知の如く、わたしは医者であり、かれはといえば法学部の授業に出席していた」の箇所は訳されていない。

いまなら「局外者」は「門外漢」、「狭窄衣」は、「狂人用」拘束衣」とでも訳すところである。つぎにもう一節原文を引いて、敏の訳しぶりを見てみよう。

【敏訳】

アレクシスを殺さうと何時思立つたのか、記憶してゐない。此考が自分と共に生れたかのやうに、如何も古馴染であつた。一つタナヤナを不幸にしてやらうと思つた。又アレクシスに取つても、もつ

と危く無い他の手段も随分考て見た事もあつた。自分是不斷から無益の殺生や殘刻の行を好まない。幸自分はあの男の心を左右し得るから、他の女に飲らせたり、大酒家にしてやる事も出来る。元來彼奴は少し酒がつけ過ぎる方であつた。然しそんな策は役に立たぬ。夫が他の女に關係しようが酒臭い體で抱付かうが女は依然として幸福に暮すやうに勉めるくらゐ、ぞつこん打込んで、何が起らうともうあの男の奴隷になつてゐる世の中にはさう言つた奴隷のやうな人間が澤山居る。



dès le premier instant 「はじめから」は語脱である。d'abord 「まず」「最初は」も語脱である。日本語の「嵌はまらせる」は「(女に)おぼれさせる」の意である。敏は古風な表現を開いた。Il lui fallait cet homme 「彼女にはこの男が必要であった」も、同じく語脱である。

こうして敏の訳には、脱行が多々あり、翻訳者としての姿勢を問われてもしかたがない部分があったことは否めない。

\*

敏の誤訳論争は、七、八月の二ヶ月ほどで終そくしたが、『無名通信』の記事をよんだ和氣律次郎(ペンネームは水上規矩夫、一八八八〜一九七五、『大阪毎日新聞』記者、翻訳家)は、この記事に触発されたものか、『新小説』第一四年第一一卷(明治42・11)の「譚叢」において、――

粥かゆ 杖づえ  
(翻訳難と御風氏孤雁氏)

注・粥杖とは正月十五日、あずき粥を煮るときの燃えさしの木を削ってつくった杖。

といった表題のもとに、相馬御風(本名・昌治、一八八三〜一九五〇、明治から大正期の詩人、評論家。早大英文科卒業後、『早稲田文学』の編集に従事)と吉江孤雁(本名・喬松、一八八〇〜一九四〇、明治から昭和期の詩人、フランス文学者。早大英文科卒業後、『新古文林』の編集に従事、のち四年にわたる留学をおえて早大仏文科教授)の訳業を批判した。「上田敏氏の誤訳事件には大に議論すべき余地が有ったが……」と述べたあと、「御風孤雁二氏の誤訳に至つては驚おどろくより外ほかに途みちはあるまいかと思ふ」とある。

御風が訳したトゥルゲーネフ(一八一八〜八三、ロシアの作家)の『その前夜』(一八六〇)『父と子』(一八六二)、孤雁が訳した『ツルゲーネフ短篇集』(『獵人日記』一八四二〜五二)は、もしこれらが「翻訳」と呼べるものなら、世の中に翻訳くらい容易なことはあるまい、という。そしてこの二人の誤訳が、いかにはなはだしきものであるか読者諸君に紹介したい、といい、具体的に原文(英訳)を引いて、そのまちがいを指摘した。

たとえば、『父と子』を例にとると、一頁に平均一ツ半誤訳があるから、一冊三五九頁のなかに五三八・五あるはずだという。孤雁氏の翻訳にも、御風氏とおなじように一頁に二ツ位あるという。だから『ツルゲーネフ短篇集』の誤訳の総数は、数百を算するであろうと、のべている。評

家が相馬と吉江に求めた点は、今後は翻訳家としての責任をまっとうして欲しいこと。文章の上手へたは差しつかえないが、一般読者は、原文と対照することの労を惜しむから、看板にいつわりないよう注意していただきたいというものであった。

明治四十二年九月中旬——上田敏の反論「小生の翻訳(上)(下)」が出、誤訳論争がおさまってから——『読売新聞』(日曜版、明治42・9・19付)は、「翻訳雑誌」(三段組み)を掲載した。執筆者は生方敏郎(二八八二—一九六九、随筆家・小説家・評論家。早大英文科を卒業後、『東京朝日』『やまと新聞』『早稲田文学』の記者。『明治大正見聞史』春秋社、大正15・11を著した)である。

この記事は、翻訳についてのとりとめの話をしたものだが、一ヵ月以上も前の誤訳論争が歯切れのわるいものであったから、その埋め合わせに『読売新聞』の方で用意したものかも知れない。生方の記事の要旨は、つぎのようなものであった。——西洋文学の翻訳が近ごろだいたい読まれるようになったこと。訳者は原著者の崇拜者か研究者であったりすればひじょうによい。近ごろ誤訳告発が盛んになっている。古株連がけんか面づらでさわぎ立て、一つでも他人の失策をみつけると、鬼の首でも取ったように天下に呼号する。

誤訳だ重訳だというようなコセ／＼したことは、術学者や中学の文典教師らにまかせ、訳者はよろしく原作者の心のなかに入ることを心がけるべきである。翻訳といえば、すぐ思い出す名前は、二葉亭氏と森鷗外先生である。上田敏氏は西洋文学の紹介者として、文献に偉勲ある人である。翻訳の方法は、鷗外氏を学んで、それより一步も出ていない。等々。

生方のこの記事が『読売新聞』に載って十日ほどすると、『無名通信』はロシア語学者・八杉貞利(二八七六—一九六六)の「我国に輸入せられたる露西亜文学につきて」を発表した。その趣旨はつぎのようなものである。——かつて文壇のある大家は、外国文学の翻訳は、ただ誤訳のない逐語訳であればよいというのではない、といった。その訳が一般読者をおもしろく読させるのでなければ、何にもならぬ、といったことを記憶している。わたしもまたこの意見である。

多少の誤訳や字句の違いがあったとしても、量においてはなるべく多く、質においてはなるべくおもしろく訳して、外国文学の趣味をわが読書界に伝えるのが今日の急務である。ささいの誤訳があるからとて全体を棄てることをじぶんはしない。ちかごろロシア文学の誤訳はながよく聞えるにつけ、その大綱のうえから、小さいことはこれを大目に見、その貢献を歓迎したい、と述べた。

\*



森 鷗外



向 軍治  
『三田評論』昭和37・1より。

## 森 鷗外

上田敏がじぶんにたいする誤訳告発の弁明文を『読売新聞』に載せた約三年後、——明治四十五年（一九一二年）五月二十九日と三十日に、こんどは文壇の寵児のひとり森鷗外（本名・林太郎、一八六二〜一九二二、明治から大正期の軍医、小説家・評論家・翻訳家）が、同紙において慶応義塾大学のドイツ語教授・向軍治（一八六五〜一九四三、独逸学協会学校、神教神学校にまなぶ<sup>19</sup>）によって、その訳業を非難された。

当時の翻訳界において「頭地を抜いていたのは（他よりもぬきんでていたの意）森鷗外であった。<sup>20</sup>

向が槍玉にあげたのは、鷗外訳「寂しき人々」（ドイツの劇作家・詩人ゲルハルト・ハウプトマン「一八六二〜一九四六」の*Die Einsame Menschen*, 1890）であり、ついで文部省の文芸委員会が、ドイツ語のできない鷗外にゲーテの『ファウスト』（一八〇八〜三二）の翻訳を委嘱したことであった。その記事は、題して「森鷗外氏の翻訳と文部省の責任（上）（下）」という。向によると、ドイツの国宝ともいべきゲーテの『ファウスト』が、幽霊のような翻訳にでもなったら、世界の物笑いはともかく、神聖な芸術にたいして申し訳ないという。

訳書『寂しき人々』（明治44・2・16〜4・25までの間、『読売新聞』に掲載され、同年7・1金尾文淵堂から単行本として刊行）は、向による

新聞 實讀 (日曜日)

明治四十五年五月廿九日



森鷗外氏の翻譯と文部省の責任

森鷗外博士の著しき『わが國』に就きて、向軍次郎の大變面白く御説教だつたね。...

鷗外の訳業を批判した向軍次の記事 (『読売新聞』明治45・5・29付)

と森氏の訳はいかにも「蕪雜」(ことばが乱れ、筋道が立たぬもの)であるという。もし「ファウスト」の訳が、「寂しき人々」と同じようなものであるなら、文部省も考え直したほうがよからうという。...

〔向軍治訳〕

大變面白い御説教だつたね。ね、ゲエテ。でも、お母様それは却て困りますよ。私になんぞ似て貰ひたく御座いませぬ。

まるでゴライアスの手の様でございます。

汝(な)われを祝せばさらしめず(聖書の句)

お父様、只今は外の庭が余程宜しう御座ります。部屋の中より遙暖(はるかたか)です。

皆貴(みなあなた)君の先生ですか。

(主人) 君は何ぞ笑ふの。

(画家) 僕? 何故だつて面白いからさ。

(主人) 面白い?

〔森鷗外訳〕

今の御説教は好く出来たぢやないか。お前さんはさう思はないかい(六頁)。

どうぞ、お母様そんな事を仰(おっしゃ)りやらないで下さいませ。私になんぞ似ては困ります。私は似て貰はうなんぞとは思(おも)はぬのですもの(八頁)。

それ、あの大きな棒を持つて入らししやる神様がございませぬ。あのヘラクレス様のやうなお手(て)でございませぬ(九頁)。

よしや汝(な)我(われ)を祝すとも我(わ)汝(な)を免(ま)さじ(二三頁)。

お父様、あちらの外の方が庭が見えて宜しうございませぬ。あの却(かえつ)て室内よりあちらの方が暖(ぬく)い位でございますの云々(二八頁)。

この先生方の講義をみなお聞きになつたのですかな(二九頁)。

(主人) 君何を笑ふのだい。

(画家) 僕かね、なぜ問ふのだ、面白いから笑ふのさ。

(主人) 君は面白いのかね。

(画家) さうさ。それが何うした。

.....  
(画家) 面白いよ、君は僕が面白い理由を認めないのかね(三二頁)。

向が指摘する鷗外の欠点は、(一) 古文体がじょうずではあるが、その言文一致は文にも何にもなっていない。(二) 原著者の言外の意味を玩味できない。(三) 平易な文のくせに誤訳が多い。(四) 会話における語呂(ことばのしゃれ)を理解できない。(五) 口述の翻訳を筆工に書かせ、そのまま訂正しないで出版している等々<sup>(21)</sup>。

そして向の結論は、まだ『ファウスト』の訳が出ないから、文部省の責任を問うのも無意味ではない、というものであった。けっきょく『ファウスト』は、大正二年(一九一三)一月から二月にかけて二巻本として富山房から刊行された。

鷗外は『読売新聞』に載った向の記事をよんだようであり、その日の『日記』に、――

(明治45・5)

二十九日(水)。(前略) 向軍次の Einsame Menschen 誤訳指摘読売新聞に出ではじめ

と記した<sup>(22)</sup>。

『読売新聞』に載った向の誤訳指摘の記事にたいして、鷗外は何ら反論を発表しなかった。が、内心批判者にたいしていろいろ不服があったはずである。鷗外には「田楽豆腐」と題する短篇小説がある。明治四十五年七月二十一日に書きおえ、大正元年(一九一三)九月一日発行の雑誌『三越』(第二巻第十号)に「鷗外」の署名で発表された。

作品の冒頭一、二ページに、主人公の木村(おそらく鷗外本人のことであろう)と女房との間で、つぎのような会話がこなされる。

――あなた植物園へ入らっしゃってと、台所から細君が声をかけた。

――そうさなあ、住こうと思ってるのだが、と、木村は新聞の間に畳み込んである附録を引きだして広げながらいった。

——いらっしやるなら、涼しいうちにいらっしやいよ。いま何をしていらっしやるの。

この話し声にまじって、洗った皿をカゴの中に伏せる音がする。

——いまかい。蛙を呑<sup>かえる</sup>んでいる最中だ。

台所で細君がみじかい笑い声をもらした。「蛙を呑む」というのは、エミール・ゾラ（一八四〇〜一九〇二、フランスの小説家）のことばである。作家は毎朝、新聞で悪口をいわれる。その悪態をぐっと呑み込むのだ。生きた蛙を丸呑みするようにがまんするのである。主人公の木村は、毎日のように新聞で悪口をいわれている。いつとき最<sup>もと</sup>んに翻訳をやったので、翻訳家という肩書がついている。

ところがついこの間、勇猛な批評家（向軍治のことか）が出て、木村の翻訳は誤訳だらけだと喝<sup>か</sup>破<sup>ぱ</sup>した。それは大いにうけた。木村を弁護する者でも、誤訳でないまでも拙訳（まずい訳）だといった。そのため木村の書くものには何一つ価値のあるものはないということになった。

いま木村は、新しい肩書きをちょうだいした。「誤訳家」というのが、それである。この夏から各紙には、いろいろな批評家が入り替り、立ち替り、誤訳者木村をひやかしている。

例の誤訳退治のとき、細君は、

——あなた本当に間違っていないのなら、なんとかいっておやりなさいな。

というと、木村は

——ところがなんともいわないね。

といった。

——では間違っていたの。

というと、

——間違いなもんか。間違えたって、蛙のみつけるような間違いはしない、といった。

この短篇の制作時期から考えて、この作品は読みよくなるようには、鷗外のうっ憤を晴らしたものと考えられよう。



島村抱月

いる。

翻訳の中味にはいっさいふれず、あたかもこの邦訳が雅馴な日本語の形成に資するような批評である。しかし、『ファウスト』の翻訳が公刊されてから、伊庭孝、杉梅三郎、向軍治、沼波武夫などから、翻訳上の誤りについての指摘をうけた。中でも向軍治は『新人』という雑誌で誤訳を指摘した（大正二年九月以前の号であるらしい、未見<sup>24</sup>）。その指摘にたいして、鷗外は「向君には私はまだ礼を言はずにいる。新人の書振<sup>かきぶり</sup>では、私なんぞが礼を言ったって受けられぬかも知れない。しかし、とにかくここで感謝の意だけ発表しておく」（「不苦心談」と、応えている。

\*

雑誌『新日本』は、大正三年（一九一四）七月末から十一月末まで四回にわたって「日本に於けるイプセン劇の誤訳を嗤<sup>わら</sup>ふ」と題する誤訳を指摘する記事をのせた。やり玉にあげたのは、主として――

- |      |      |      |
|------|------|------|
| 森鷗外  | 草野柴二 | 千葉掬香 |
| 島村抱月 | 湯浅温  | 柳川春葉 |
| 佐藤紅緑 |      |      |

ら四名である。批評者は「尻<sup>し</sup>沢<sup>さ</sup>辺<sup>べ</sup>の布<sup>め</sup>刈<sup>かり</sup>」といった変わった筆名をもつ水産植物学者・遠藤吉三郎（一八七四～一九二一、二高をへて東京帝大動物学学科卒。のち札幌農学校教授。明治44～大正3年までドイツ、ノルウェー、イギリスに留学した）である。いまこれら七名の訳者のうちから、

森鷗外の訳文「ノラ」と島村抱月（一八七一一一九一八、明治から大正期の評論家・劇作家、のち早大教授）によるイブセン（二八二八〜一九〇六、ノルウェーの劇作家）の「脚人形の家（完 抱月訳」（二八七九年）の訳業についての遠藤の批判に耳をかたむけてみよう。

何事よりも先づ述べべきは、我は文學に對しては、全く門外漢なる事是れなり。唯だ聊か諾威語を習ひ覚えしより、時適まイブセン、ビョルンソン、コレットなどの作を讀みたることあり、此頃閑に乗じてイブセン劇の和譯を讀みけるに、多くは原作と遠さかれる節少なからざるを覺えたり。是れ從來現はれたるイブセン物の和譯は、大概英又は獨の譯本より、重譯せしものなればなるべし。我れの如き覺束なき力にて、名ある文學家の筆執りてものせし翻譯に向ひて、批評がましき事書き諭ねんは、素より嗚呼のわざなるは萬々承知の上なれど、そこは盲蛇の物に怖ぢざる譬により、終に斯くは出しやばりたり。

孰れの翻譯者も Ibsen をばイブセンと讀むが如し。併し諾威にては必ずイブセンと讀めり、東京の書店にてイブセンの何々と求むれば、常

にイブセンですか、と問ひ返さるべし。これは殊の他に可笑し、のみならず英譯よりせる翻譯は、登場人物の名を英語讀みにし、獨譯よりせる人は獨逸讀みにす。

このあと批評家の遠藤は、ノルウェー語の原書と鷗外と抱月の訳とを対照しつつ、両者の誤りを指摘している。鷗外はドイツ語訳から、抱月はウィリアム・アーチャーの英訳とランゲの独訳から訳した。第一幕目に現れた日常の慣用句を両者は、つぎのように訳しているという。

〔遠藤訳〕

大奮発でしたね。

〔鷗外訳〕

好く思ひ立ちなすつたのね。

〔抱月訳〕

勇気がありますね。



魚の如く新鮮に。

え、／＼、清水の中のお着のやうになつて帰り

鍛へた様に達者になりました。

如何にも御尤で。

なんでもないのでよ。

なあに誰でもないんですよ。

ねッねッ。

どうぞせう。

出来ますか。

如何にも其通り。

まあ、そんなものですわ。

え、。

正に其通り。

確實です。

確かにさうです。

その他、誤訳とみとめられる例をさらに列举している。

お前は矢つ張り女で御座候。

こら、お前は矢張り女だなあ。

これ、ノラ！お前は何て女だらう。

おや又あなた、其事で妾をチヨスのね。

又あの事を云つて、わたしを擲揄ふのね。

あら、あなたは、またそんな事を言ひ出して、

奥さんは御気が強いですね。

はあ、ひどく大膽ですね。

思い切りがよすがすな奥さん。

用達小僧。

傳便

使いの男

遠藤によると、鷗外と抱月の訳を比較すると、前者は原作の一句をも省略せず、精細をきわめている。しかし、あまりにも直訳にすぎ、原文を文字通り訳しているため、何の意味か理解できないところが多々あるという。一方、後者は簡略にすぎ、原作から遠く離れている。原文の意義情調がまったく失われている、という。評者がいいなかったのは、イプセンを翻訳したければ、ノルウェー語を十年学んだのち、まじめに訳してもらいたい、ということであった（『現代の翻訳界に警告す』『帝国文学』第十一卷第九号所収、明治38・9）。鷗外は『新日本』に出た訳文ノラ（「人形の家」のこと）の批評をよみ、その内容の全体に不服をおぼえ、「単語の評に答ふるに単語の評を以てした」といい、「反論めいた記事を『歌舞伎』第一七四号（大正3・12・1）に発表した。この記事は、のち「亡くなつた原稿」と題して『妄人妄語』に収められた。

譯文ノラの評と云ふのは、私のノラをドイツ文から譯したものだとし、島村抱月君のノラをイギリス文から譯したものだとして、評者自己はノルウェー

の原文に據つて右の二つの譯の當否を裁判することにしてある。詰まりすばらしく高い處に地歩を占めて、私と島村君とを脚下に見て、えらい事を言ふ。脚下に蠢いてゐる私や島村君は、どちらもノルエイ文を見たことがないのだから、私にしる、島村君にしる旨く譯し當てゝゐたら、それは偶中（まぐれ）あたり——引用者）である。頭から當るも當らぬもあつたものではない。

評者はノルエイ文に據つて宣告をするにしても、若し私の譯をばドイツ文に引き較べ、島村君の譯をばイギリス文に引き較べるだけの手敷を掛けてくれたら、二人の譯の當否と云ふものが定められたであらう。併し高く止まつてゐる評者は、そんな事をするのを屑（いさま）とししない。

私は批評を読んで腑に落ちぬ事が多かつた。そこで何か書かなくてはならぬとなつた時、批評の評を書かうと決心したのである。私はX記者を待たせて置いて、大急ぎで書きなぐつた。

鷗外が不満におもつたのは、評者がじぶんの訳と抱月の訳との主なる違いを指摘せず、ただ訳の単語の違つてゐるのをたくさん羅列してゐることであつた。

日夏耿之介（このすけ）（一八九〇〜一九七一、大正から昭和期の詩人・批評家・英文学者、のち早大教授）は、『新日本』に連載された遠藤の誤訳指摘記事を興味をもってよんだ一人であつた。かれは遠藤評について、「（鷗外訳を）誤訳と称したのは向軍治氏と遠藤理學博士で、前者は文法から見ればと居直り、後者は那威語（ノルウェー語）に精通し身親しくその土を踏んだ者から見ればと、かさにかかつて（上から押さえつけるように威圧的な態度をとる意——引用者）の所説であつた」としている。（日夏耿之介「鷗外 VERSUS 文場——「諸家の鷗外観」読後の文を求められて」『鷗外研究』第七号所収、鷗外全集 著作篇 第一七卷附録、昭11・12）。

そして日夏は、評者遠藤のことを「鷗外抱月二氏を比較して屠殺（バツナゲル）評した愛嬌（あいきょう）に富む門外漢であつた」とユーモラスに呼んだ。

むすび

大方の日本人は、外国語を学ぶとき、活字本から入っている。われわれは母語である日本語を耳から聞いて、また学校に上つてからは教師が話すことばや読本を通じて、国語力をつけていった。すなわち、われわれ日本人は母語の世界にどっぷりとひたりながら、自然に一定ていどの日本語力を身につけていった。が、外国語となると、子どもとおとなの中間期に書物から入っており、子どものときから自然に英語やフランス語やド

イツ語を覚え込んだ人々とおなじに考えるわけにはゆかぬ。

読書から入った語学は、多くの短所や弱点をもつのが当然であり、つまらぬ間違いを犯す。外国文は一読しただけでは、すぐわからない。二、三度よみ返すうちに少しづつわかりかけてくるときもあれば、最初からまったく歯が立たぬときもある。そのときは辞引のやっかいになるのだが、それはまるで辞書が翻訳を代行しているようなものである。南宋の儒学者・朱熹（一一三〇～一二〇〇）のことばに、「読書三到」というのがあつた。この辞句の意味は、心と目を書物に集中し、口で書物をよめば、必ず中味がわくというのである。が、外国文学のばあい、おいそれと理解できるものではない。原文を語学的に正しく解釈すること自体がひじょうにむずかしい。

語学教師は、ときに珍妙かつ愚鈍な誤訳を教場でやりながら、おく面もなく俸給をちょうだいしている。教場での翻訳は、数十名の学生を相手に舌だけでやっているため、ほとんど他に知られることはない。しかし、はっきりと紙の上に印刷された誤訳は、末代にわたって人の眼にさらされることになる（佐々木直次郎「翻訳苦楽抄」）。

翻訳の事業がさかんになれば、誤訳指摘の火の手があちこちで起るのは当然である。いつとき語学の達者な人士が誤訳指摘というあら捜しの分野にまで進出し、誤訳した相手を「乱訳家」として指弾した。

わが国において西洋小説が文学として翻訳されたのは、西南戦争をピークとして維新以来の兵乱がおさまった明治十年（一八七七）以降のことである。日本はやや安堵した状態に入った。平和文明の準備段階に入り、同十五、六年ごろから新文芸の準備期がはじまった。<sup>(25)</sup> 翻訳文学は近代日本文学史上、大きな位置をしめるものであるが、明治初年から二十年ごろの欧化主義の時代、わが国にまだ見るべき文学が現われぬころ、<sup>(26)</sup> “翻訳時代”が現出した。翻訳者は文学専攻者ではなく、政治家・官吏・教師・新聞記者らが余技的にやった。<sup>(27)</sup>

明治時代の四十五年間における「翻訳文学」の発達の跡をたどると、およそつぎの三期に大別できようか。

- 第一期……明治初年から同十年代（啓蒙家活動の準備時代）
- 第二期……明治十一年から同二十年代（政治小説全盛期をへて、西洋文学の紹介翻訳が盛んになる）
- 第三期……明治二十年から同四十年代（翻訳の進歩発達時代）

注・吉武好孝著『翻訳文学発達史』（三省堂・昭和18・7）と柳田泉著『明治初期の翻訳文学』（松柏館書店、大正元・8）を参照。

いうまでもなく、翻訳は文化的な活動であるが、明治期の翻訳を大観すると、かなり蕪雑粗笨なものが横行していたようだ。翻訳文学の第一期から第二期における傾向は、原著の主要部分のみを読者に伝えることに主眼が置かれていた。そのため訳者はその部分だけを選び、他はすべて省略するか、あるいはおおよその意味だけを伝えようとした。またときに訳者は原著のタイトルや筋や人物や思想までもてきとくに脚色し、まったく別物につくり替えた。この時期の翻訳は、一冊まるごと訳すのではなく、いわゆる抄訳（縮訳）であった。訳文は漢文直訳体といおうか——漢文と国文とをつき交ぜたような奇態な日本語であった。それはこんにちから観ると、じつに佶屈（ききくつ）（文字や文章がむずかしく、意味のとりにくいこと）なるものであった。

翻訳界のこのような傾向に従い、またその潮流に乗って花袋や敏や鷗外などは、海外文芸の紹介をおこなった。西洋文学の翻訳の基準が暗黙の了解として定められる契機となったものは、二葉亭四迷が、ツルゲーネフの『獵人日記』の一節をロシア原文から訳した「あひびき」（明治21・7）である。このときからわが国の翻訳文学は、新しい発展段階に入った。<sup>(28)</sup>二葉亭は自由な言文一致（文章を話しことばに一致させた）とそれまでもだれも手をつけなかった原文尊重主義——文学作品を忠実に訳すことに努めた。

さて本論に立ち返り、花袋・敏・鷗外の訳業にたいする非難の当否や瑕疵（欠点）についてのべてみたい。まだ無名時代の花袋は、トルストイの『コサアク兵』（博文館、明治26・9）の翻訳のしことをもらったとき、内心歓喜したようである。語学は不完全だし、翻訳もはじめてであったから、当初とても出来そうに思われなかった。しかし、それもどうやら曲りなりに漕ぎつけた。その翻訳はめちやくちゃであったにちがいないかと、と語っている（田山花袋作『東京の三十年』）。

その後、かれの語学力は目覚ましい進歩をとげたとは思えないが、心もとなない理解力でモーパッサンの短篇やキーツの詩を訳した。あやふやの英語力で訳したものだけに、ときに自由にすぎ、原作から脱線したのは欠点とすべきであろう。非難の対照となりうる点は——固有名詞の誤読、創作的加筆、自由訳、訳し落し、意識、難語の使用などである。敏のばあいかどうか、どちらも大同小異である。原文の省略、創作的加筆、自由訳（創作文）、意識、訳し落し、難語の使用などがみられる。鷗外のばあいかどうか。

鷗外は明治三十八、九年（一九〇五、六年）のころ、「予の若い時分の翻訳は、原文の各部分をそのまゝ伝えるという標準からすると、もとより欠点のすくなからぬものであろう」という主旨のことをある人にいったらしい（『明治文壇の人々 三田文学』岩波ブックサーピスセンター、

平成5・7)。

鷗外は、「わが訳文を欧文とくらべ見て評せん人は、かならず獨逸文に依られんことを」(『我訳稿に就きて』『志がらみ草紙』第五二号所収、明治27・1)と、誤訳指摘にたいして若い時分から予防線を張っている。評家が指摘するまでもなく、その訳業はいろいろ欠点があったことは否めない。『即興詩人』(春陽堂、明治35・9)は、原作(ドイツ訳)以上といった賛辞をうけたようではあるが、レクラム版デンハルトのドイツ訳 *Der Improvisator* (Nr.814-817)で鷗外訳と較べてみた沢柳大五郎(一九一〇〜一九九五、ギリシャ美術および鷗外研究家)によると、自由に原文を省略したり、原文にない言葉を補ったりしているという(『即興詩人』その独訳と邦訳『鷗外研究』第二四号所収、鷗外全集翻訳篇 第三卷附録、昭和13・10)。

筆者はむかし、鷗外がドイツ語訳から重訳したポー(一八〇九〜四九、アメリカの詩人・短篇作家)の短篇三作(「うづしほ」「十三時」「病院横丁の殺人犯)のうち、とくに「うづしほ」(「メエルストロムに吞まれて」<sup>29)</sup>の訳しぶりを吟味したことがあった。が、そのときの印象では、鷗外は原文の一言半句の厳密な詮議に拘泥せず、のびのびと訳していた。しかし、語学的な欠点を避けえず、訳者による潤色の加筆、自由訳、訳し落し、単語の意味の取りちがえ、誤訳、意識的な誇大表現などがみられた。これらの欠点の一部は、花袋や敏の訳業にも共通するものを包含しているといえる。

しかし、鷗外は過誤(あやまり)ない書物がないと同様、「翻訳に誤訳のない翻訳はない」ことを百も承知していた。ストリンドベリ(一八四九〜一九二二、スウェーデンの劇作家・小説家)の「戯曲債鬼」(『歌舞伎』第一〇九号所収、明治42・8)には、意識的にごまかして訳したところがあるという<sup>30)</sup>。かって夏目漱石は、「世人ハ翻訳シテ甘クユカザレバ 己レノ力足ラスト思フ……」といった(「ノート」漱石全集 第二二卷所収、平成9・6)が、訳者のすべてが十分な力量を備えているわけではない。

花袋、敏、鷗外らが翻訳において共通の過ちを犯したには、何らかの理由なり原因がなければならぬが、それは何であったのか。誤訳をした当人は、けっして誤訳をしたとは思っていないはずである。翻訳は原著をじぶんにとって可能な、また好きな言葉に直す半ば創作でもある。文筆を業とする花袋、敏、鷗外らは、逐字訳という大きな箍(輪)にとらわれず、自由主義的訳法にもとづき、大意だけを移せばよい、といった放縦(わがまま)な考えに捉われていたのかも知れない。かれらの眼中にあったのは一般読者であり、いまでいう自由訳もしくは翻案にちかい訳文をつくり、興味本位の読物風に仕立てた。それがまた受けた。かれらはこうした改造をいささかも後ろ暗くおもわなかったかもしれぬ。しかし、か

れらはたまたま運悪く、自由訳でない真正しんせいの翻訳を求める者の歯牙にかかったといえる。

明治期の翻訳は、いったいに正確なものであったようだ。あの時代の翻訳は、原作をてきとうに解体し、それを半ば創作的に再生したものであった(楠山正雄「翻訳今昔」『書物展望』第五八号所収、昭和11・4)。内田魯庵(一八六八〜一九二九、明治期の評論家・小説家)によると、誤訳はかえって平易なところに生ずる、という。原文を理解する力、日本語の技術に乏しい者は翻訳の筆をとるべきでない、といいたいのかも知れない(『原文の印象と訳文の趣致』『内田魯庵全集 第六卷』所収、ゆまに書房、昭和59・11)。

外国文学を味わおうとする者、また翻訳に従事する者は、しっかりとした語学の修養のうえに立たねばならぬ、というのが、平田禿木とくぼく(一八七三〜一九四三、明治から昭和期にかけての英文学者)の言であるが、語学力のかん養は容易ではない。一冊の訳書のなかに、間違いが何百箇所もあれば、それは大きな問題であるが、許容範囲のものであれば、重版のときに訂正しておけばよい。しかし、本が売れぬいまの時代、それはむずかしいことかもしれない。「志こころざしある者は誤訳の指摘など恐るゝに足らぬ」と31といったのは、長谷川天溪てんけい(一八七六〜一九四〇、明治から昭和期の評論家・英文学者)であった。

翻訳大国日本には、いま翻訳の代表選手がごまんとおり、かれらは大家たいか、中家ちゅうか、小家しょうか、無名家むめいかに分類される。みな日夜、一つの文化事業に携り、苦闘を強いられている。いまはむかし、遠い明治という時代に、海外文芸の紹介に尽した文士——花袋、敏、鷗外らにたいする筆誅は、文化移植過程における笑い話としてすまされる大事件であった。……

注

- (1) 新村出「西洋文学 翻訳の嚆矢」(『太陽』第十六卷第五号所収、明治43・3)
- (2) 岩波講座 世界文学 木村 毅 斎藤昌三『西洋文学翻訳年表』(岩波書店、昭和八年七月)、四頁。
- (3) 注(1)におなじ。
- (4) 岩波 講座 日本文学史 第十四卷 近代 太田三郎『翻訳文学』(岩波書店、昭和三十四年五月)、三頁。
- (5) 唐 長孫無忌等撰『隋書經籍志』(上海 商務印書館出版、一九五五・一一)、一四四頁。
- (6) 岩波講座 世界文学 野上豊一郎『翻訳論』(岩波書店、昭和七年十一月)、三頁。

- (7) 木村毅「翻訳文学雑考」(『早稲田文学』所収、大正14・7)
- (8) 柳田泉「明治翻訳文学概説」(『明治文学史集説』所収、日本文学社、昭和七年六月)、一五七頁。
- (9) 木村毅『明治文学展望』(改造社、昭和三年六月)、六八頁。
- (10) 朝日常識講座 第八卷 土岐善磨『文芸の話』(朝日新聞社、昭和四年五月)、二二七頁。
- (11) 後藤末雄「フランス文学と私」(『書物展望』第五十八号所収、昭和11・4)
- (12) 伊狩章「花袋とモーパッサン——その比較研究」(『弘前大学人文社会』第四号所収、昭和29・1)
- (13) 日夏耿之介「紀季文学輸入閑話」(『明治文学襍考』所収、梓書房、昭和四年五月)、三八九頁。
- (14) 伊狩章「日本文学とフランス文学(2)——モーパッサンの輸入とその媒介者」(『比較文学 日本文学を中心として』(矢島書房、昭和二十八年十月)、二一九頁。
- (15) 宇野浩二「外国文学の影響 一 花袋、白鳥、秋江」(『わが文学遍歴』所収、白鯨書房、昭和二十四年七月)、四七頁。
- (16) 注(12)の二四頁。
- (17) 注(15)の四九頁。
- (18) 高山樗牛(二八七—二九〇二、明治期の評論家)は、上田敏が語学(英独仏伊、ギリシャ・ラテンの古典語)に堪能であることに敬服の意を表していた、という(素人「故 上田博士三周忌 上田君の思ひ出」『太陽』所収、大正7・6)。
- (19) 大場柯公(本名・景秋、一八七二—?)ロシアにおいて行方不明となる、明治・大正期のジャーナリスト)の「日本の語学者」(『太陽』第二十卷第七号所収、大正3・6)に、「獨逸語に至りては京大に藤白禎輔氏あり、慶大に向軍治氏あり、早大に藤山治一氏あり、…」とある。
- (20) 「第三編 小説及び評論壇」(『太陽』第十五卷第三号所収、明治42・2)
- (21) 翻訳を口述したという非難に対して、鷗外は「原稿は私の書いたものを、筆工(筆耕——報酬をえて筆写する人の意——引用者)に写させた。それが印刷所に回ったのである。原稿を口述して筆写させたと云ふ人があるが、そうではない」(「不苦心談」『鷗外全集 第十二卷』所収、岩波書店、昭和四十七年十月)、八八四頁。
- (22) 『鷗外全集 第三十一卷』(岩波書店、昭和二十七年十一月)、三三四頁。
- (23) 「後記」を参照。『鷗外全集 第十卷』(岩波書店、昭和四十七年八月)、六一八頁。
- (24) 未津八良『誤訳論』(『三田文学』所収、昭和14・7)
- (25) 「明治の文学」(『新日本』第一卷第九号所収、大正元・8)

- (26) 塩田良平『明治の作家と作品』（人文書院、昭和十八年七月）、一五頁。
- (27) 柳田泉『明治初期の翻訳文学』（松栢館書店、昭和十年二月）、三二頁。
- (28) 吉武好孝『翻訳文学発達史』（三省堂、昭和十八年七月）、八一頁。
- (29) *A Descent into the Maelstrom*（一八四一年）の独訳 *Im Strudel des Maelströms* のこと。
- (30) 小山内薫「鷗外先生の詞」〔『鷗外研究』第九号所収、鷗外全集著作篇 第八卷附録、昭和12・2〕
- (31) 「和訳の理想と実際」〔『新潮』第十九卷第五号所収、大正2・11〕